

# 支援の手引き ～ 中学校版 ～



大分県教育センター特別支援教育部  
平成21年3月

## はじめに

障がいのある子どもたちの支援の充実に向けて「特別支援教育」が各校種の実情に合わせて進められてきました。特別支援学校が特別支援教育推進のセンター的な機能の充実に向けて取り組んでいることもあり、地域の特別支援教育が一步一步着実に充実してきています。そのような中、当教育センターに寄せられる特別支援教育相談では、「学習が遅れが見られるが、何かよい支援策はないだろうか」「集中して学習や活動に取り組めないが、どうすればいいだろうか」といった内容が、数多く寄せられています。このような相談内容が寄せられるようになったのは、周りの大人が子どもたちの困難な状態を意識してきたからだといえるのではないのでしょうか。しかし、この子どもたちの困難な状態を理解しつつも、支援の方法が適切でなかったり、どのような支援を行えばいいのかわからなかったりと、まだまだ多くの教師が困っている現状があるのも事実です。特に中学校では、教科ごとに教師が異なる教科担任制により、多面的、多角的に生徒の実態を把握することができません。しかし、その反面複数の教師が関わることで指導、支援の統一性が保てず、生徒の困難な状態が解消されないことに、教師が苦慮している様子がうかがえます。

そこで、中学校の教師が子どもたちの困難な状態に直面し、支援に苦慮したときに活用できるように、特に、相談事例の多い学習面に関する支援策、小学校や保護者・他機関との連携を中心に記述した手引きを作成することにしました。本手引き書を困難な状態のある生徒の支援に役立て、中学校における特別支援教育の推進に努めていただきたいと思います。



平成21年3月  
大分県教育センター  
所長 山本 省悟

- 目 次 -

はじめに	1
中学校における特別支援教育のすすめ方	
1 発達障がいに対する基本的な考え方	3
(1) 多様な状態像と困難な状態への気付き	3
(2) 障がいの自己理解と対応について	3
2 教師としての立場	3
(1) 他の生徒や保護者とどう向き合うか	3
(2) 校内の協力体制や地域資源の活用	4
3 保護者理解と連携	5
(1) 保護者理解の基本的な態度	5
(2) 困難な状態の伝え方	5
(3) 二次的な障がいと専門機関への紹介	5
4 進路指導のすすめ方	6
支援事例	
1 事例の提示にあたって	7
2 子どもの困難な状態に対する支援事例	8
中1ギャップを解消するための支援	8
事例1：【各教科共通編】教科指導の充実	10
事例2：【国語編】文章を正確に読み取り内容を理解するため、 視覚的な手がかりを用いる	14
事例3：【社会編】板書とプリントを併用し、何を考えればよいかを明確にする	15
事例4：【数学編】TTで連携し、学習のポイントをはっきり示す	16
事例5：【理科編】本時の課題を示し、内容のまとまりで板書をする	17
事例6：【英語編】学習の楽しさが実感できるようにする、TTによる取組	18
事例7：【音楽編】音階の配列を理解するために、 色などの視覚的な手がかりを用いる	20
事例8：【体育編】動き方の理解のために、活動内容を具体的な言葉で示す	21
事例9：【技術・家庭編】具体的なイメージがもてるように完成品を提示する	22
事例10：【美術編】描かれた絵を参考にして、言葉で技法を説明する	23
【各教科の連携】教科担任連携シートの工夫	24
・『教科担任連携シート』実践例	26
・『教科担任連携シート』様式	27
・『教科担任連携シート』記入例	28
3 小学校と中学校との連携	29
事例11：小・中連携シートの活用をめざして	29
・『連携シート』記入例（児童の様子）	30
・『連携シート』記入例及び記入のポイント（学習の到達状況）	32
事例12：校区内の小学校と連携した教育活動の工夫	33
事例13：保護者との連携に向けての支援 - 連絡帳の活用をとおして -	35
A 中学校を中心にした『たての連携』・『よこの連携』	38
A 中学校を中心にした関係機関との連携	39
中学校を中心にした関係機関との連携一覧	40
おわりに	41
参考文献	42
【資料1】特別な支援を必要とする子どもへの対応	43
【資料2】児童生徒理解 ～体験プログラムをとおして～	52

## 中学校における特別支援教育のすすめ方

### 1 発達障がいに対する基本的な考え方

#### (1) 多様な状態像と困難な状態への気付き

中学生になると第二次性徴を迎え、生徒の体や心には大きな変化が見られるようになります。また、生徒の中には、親や教師に反抗的な態度をとったり、様々な原因から不登校傾向になるなど、これまでになかった状態が見られるようになることもあります。このような生徒への指導を行うにあたっては、発達障がいに起因した行動や状態も含まれている場合もあることを認識し、その見極めなど教師には適切な対応が求められることとなります。

発達障がいのある生徒には、親の育て方や本人の努力不足ではなく中枢神経系に何らかの機能障がいがあることが推定されていることをしっかり理解したうえで指導にあたるのが重要です。一人一人の生徒の状態を日頃から細かく観察するとともに、併せて前籍の小学校や保護者としっかり手を携えることが「困難な状態」の気付きにつながると考えられます。

#### (2) 障がいの自己理解と対応について

中学生の頃からは、より社会生活や学校生活に適応しやすいように自己の障がいについての自己理解とその対応を促すことが重要になります。障がいの自己理解とは、自分の得意なことや苦手なことについて、自分自身の傾向や自分らしさとして自覚することを指します。例えば「忘れ物をしやすいので荷物はひとつにまとめておこう」「興味のある理科には、とことん集中できるので、学習に充てる時間も多めにとろう」などです。また、失敗や不適切な行動がどのような場面でどの程度の強さで起きるのか、その場面に出会ったときどうすれば回避できるかなどを事前に知っていることが、社会生活や学校生活にうまく適応するための有効な対応策となります。

### 2 教師としての立場

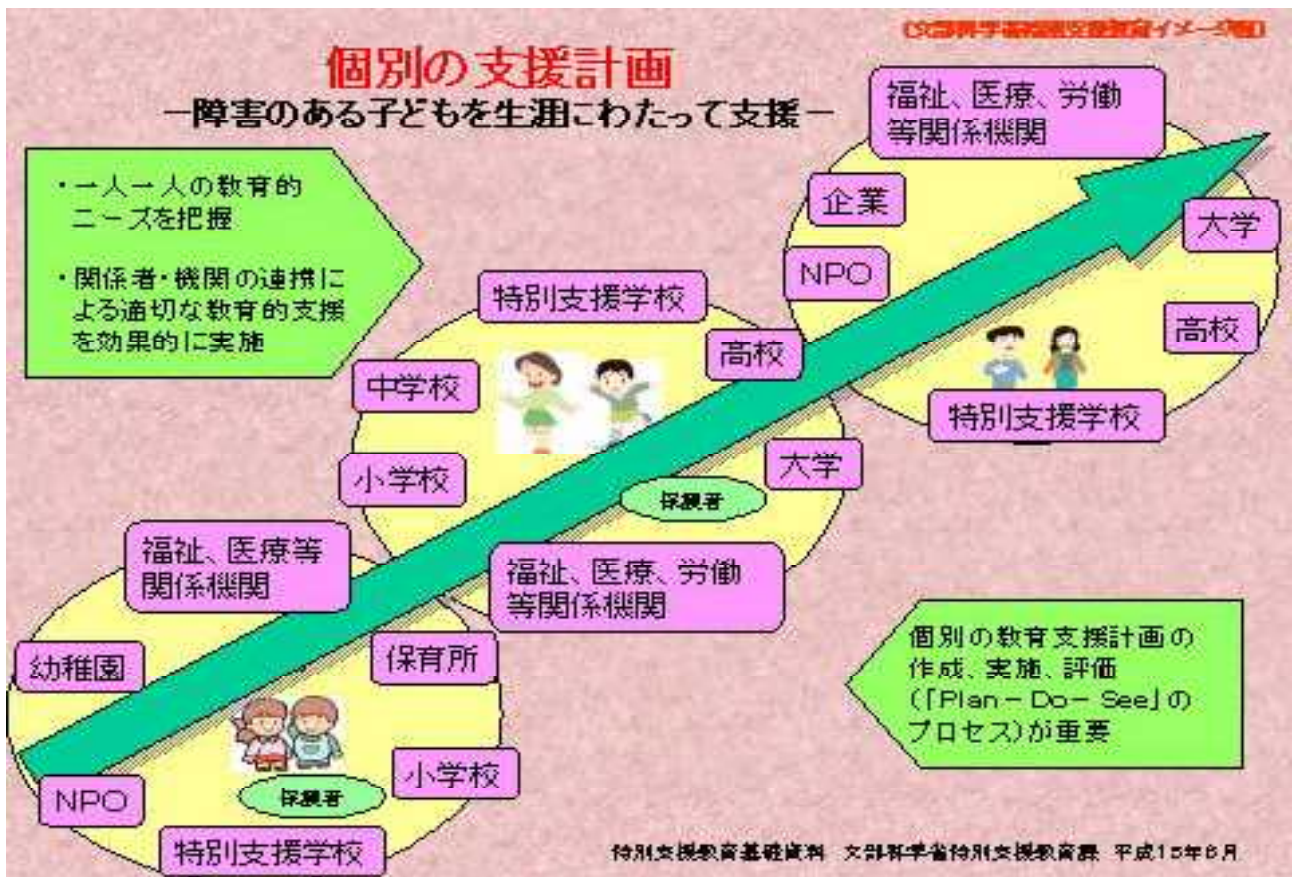
#### (1) 他の生徒や保護者とどう向き合うか

ある発達障がいのある生徒に対して、例えば学習場面で「一回の課題の量を少なくする」などの特別な配慮を行った場合に、他の生徒との対応の違いに疑問を持った生徒への説明が必要になるケースも出てきます。このような場合、その生徒がどのような意図で質問しているのかを見極めつつ、「個人の特性に応じた学習スタイル(学び方の違い)があること」の視点から説明することが大切です。他の生徒への説明は、いじめなどにつながることも考えられることから慎重に行なう必要があります。また、障がいのある生徒の保護者と十分に話し合いをもち、他の生徒にどのように説明するかについて事前に承諾を得ておくことが重要です。近年、特別支援教育の進展に伴い、周囲の生徒の理解が深まり、友人などからの適切な援助が行われるような事例も報告されています。また、本人の保護者との連携を十分図り、併せて他の生徒の保護者への理解をどのようにすすめていけばよいのかを考えていくことも大切です。



(2) 校内の協力体制や地域資源の活用

発達障がいのある生徒を担当した場合、どのようにその生徒を指導、支援していけばよいか、一人で考え悩むことがあります。特別支援教育を進めるうえで大切なことは、障がいのある生徒を学校全体の教員や地域の関係機関と連携して支援することです。



【「たて」と「よこ」の連携のイメージ図】

学校内には特別支援教育コーディネーターや養護教諭、管理職などがいます。校内委員会を活用し、多くの教職員にアイデアを求めるなど、教師間の連携が大切です。また、学校外では、地域の特別支援学校が行う巡回相談や専門家チーム相談会の活用、地域の療育機関や大学などの「よこ」の連携をすすめる必要があります。加えて、長期的な視点に立ち一貫した支援ができるように、入学前の小学校や進学先として希望する高等学校と情報交換を行い、「たて」の連携を保つなど様々な人的資源の活用を考えることが重要です。

なお、地域の療育機関の詳細については、市町村の障がい者福祉を担当する部署や特別支援学校等に配布されている「障がい者福祉のしおり（大分県）」を参考にされるとよいでしょう。



**障がい者福祉のしおり**



平成20年3月発行

大分県

【障がい者福祉のしおり】

### 3 保護者理解と連携

#### (1) 保護者理解の基本的な態度

これまでつらい立場に立たされてきた経験のある保護者もいます。まずは、このような保護者の心情をしっかりと理解した上で話を聞くことが大切です。また、高等学校等への進学や性の問題にどのように対応したらよいかなど、切実な問題に頭を悩ませていることも多いと思います。受容と共感の気持ちで接することを忘れてはなりません。保護者にとって、話しやすい教師、どんな問題でも相談できる教師を目指したいものです。

#### (2) 困難な状態の伝え方

「困難な状態にある生徒の保護者に対して、保護者が生徒の困難な状態を前向きに受け入れようとしえない場合、どのように対応すればよいか」という相談を受けます。学校で困難な状態などについて話すときは、できるだけ話の行き違いを無くすために管理職や特別支援教育コーディネーター、養護教諭等、複数の教師のいる場で話を進めるなど、学校全体で取り組むことが大切です。また、「本人が学校でどうも困っているようです。一緒に方法を考えていきましょう」「一日の流れを事前に示すことで、以前より落ち着いて生活できています」など保護者の気持ちに寄り添うとともに、うまくいった具体例を盛り込んだ話をするのが大切です。

#### (3) 二次的な障がいと専門機関への紹介

中学生の年齢になると、それまで多動的な傾向のあった生徒は、離席などの目立った行動が軽減されるために、困難な状況が周囲から見えにくくなり、障がいのない生徒と誤解され対応されてしまうことがあります。例えば、「わき見が頻繁に起こる」「宿題を提出するのが遅れる」などの状態に対して叱責を受け続けると、いわゆる二次的な障がいが出現し対応が一層困難な状態に陥ってしまう可能性があります。

二次的な障がいとは、次のような状態を指します。例えば、注意欠陥多動性障がいの場合、幼い頃から障がいとは気付かれないうまま、「性格の悪い子」などのレッテルを貼られて叱られ続けて育つと子どもの心は傷ついていきます。そのような状態が積み重なると、教師に対して挑戦・挑発的かつ反抗的な態度をとり、更にエスカレートすると、人や動物に対する過度の攻撃性や暴力、人の所有物の破壊行為などが見られるようになります。このような状態を、もともとの障がい特性（多動性や衝動性、不注意など）と区別して二次的な障がいといいます。

専門機関へは、中学校が把握している実態や地域の特別支援学校の巡回相談等からの助言等を整理したうえで紹介するとよいでしょう。医療機関を訪れた際は、診断名が付けられることがあります。診断名によって、支援の内容や方法が一律に決まるものではありませんが、周囲からの理解が得られやすくなると同時に、大まかな支援の方向性が定まることが期待できます。専門機関からの助言は、指導や支援について新たな視点が得られるなど、二次的な障がいをできるだけ小さくする意味からも大変重要です。なお、専門機関への紹介は、保護者と信頼関係を築きあげたうえで慎重におこなうことが大切です。

#### 4 進路指導のすすめ方

発達障がいのある方の中には、大学に進学し得意な分野で能力を発揮し社会に貢献している方も数多くいます。進路指導を進めるに当たっては、本人や保護者の将来の夢や希望をしっかりと受け止め、早い時期から本人の特性に応じた進路先を考えることが重要です。また、中学校では職場体験を実施していますが、このような体験は本人の適性を探る一つの機会ととらえることもできます。発達障がいのある生徒は、学習面や行動面、対人関係の面などに困難な状態があるものの、各教科等の指導を工夫することで、学習への取り組みの意欲を高め、潜在する能力を十分に発揮し本人の得意な分野で社会参加することが十分可能になります。

高等学校への進学にあたっては、オープンスクールなどに参加する等、前もって希望する高等学校の情報や雰囲気を知っておくことが大切です。また、入学後は適切な支援が継続して受けられるように保護者や地域の関係機関と連携したうえで、必要な情報を高等学校に提供をしていくことが重要です。





## 支援事例

### 1 事例の提示にあたって

県下の全中学校の先生方を対象に行った、『発達障がいのある子どもへの支援に関する調査』から、生徒の困難な状態について理解し、支援していかねばならないという回答が多数見られました。しかし、障がいの内容の見極めや支援については、「生徒の障がいの把握や具体的な支援策がわからず、適切な支援に至っていないという」回答もありました。

発達障がいの生徒の実態は様々で、支援も一人一人違ってきます。よって実態把握がとても重要になりますが、中学校は小学校のように一人の先生が終日かかわって授業や活動を行うわけではありません。1日の中で教科の異なる先生が授業を行う教科担任制によって進められています。生徒にとっては教科内容が深まり、より高度な内容が身につきます。しかし、見方を変えれば先生によって進め方や板書などが違うことになるのです。このことは、発達障がいのある生徒にとって困難な状態を感じる原因の一つにもなるわけです。

この章では、中学校における困難な状態とは何か、それは何が原因となっているのかといったことについて、困難さの解釈に基づいた支援事例を掲載しました。事前調査や特別支援教育相談の内容としては、学習に関するものが多数を占めます。そこで、今回は、学習面の支援に関する内容について取り上げることにしました。個別の事例のみならず、教科や学年の枠を超えた共通した支援策についても記述しました。各事例には、実態解釈や支援方法のポイントを具体的に述べています。困難な状態を示す生徒への支援を検討する際のヒントとなれば幸いです。

また、中学校の先生方からは「小学校からの資料が中学校の指導でそのまま利用できるものがあるといい」といった意見を聞きます。子どもにとっても小学校と同様の支援が準備されていれば、困難な状態は少なくなり快適に学校生活を送ることができるわけです。そこで、小学校版の手引きで示した連携シートを中学校の先生の意見を聞きながら『改訂版』として示すようにしました。これは支援方法の検討をするうえで、効果的なものとなると考えています。各支援事例と併せてご覧下さい。

小・中学校の連携はもとより、保護者との連携に苦慮している先生方もいると思います。とても難しく、うまくいかない学校も少なくないのではないのでしょうか。いくつかのポイントを示しておきましたので、よりよい連携を図るための一助としてください。





## 2 子どもの困難な状態に対する支援事例

### 中1ギャップを解消するための支援

#### 1. 子どもの実態

##### 「中1ギャップ」

中1ギャップには、中学1年生でいじめや不登校が増えるという現象面のギャップと、中学に進学した子どもたちが感じる小・中学校間の学校制度や教職員の指導等のギャップという二つとらえ方があります。

最上級生として自覚をもって学校生活を送ってきた6年生が、中学校に入学と同時に下級生になることによるストレスや、中学校の過密な時間割により生活環境や学習環境が違うために感じるストレスなどが推測できます。友だちや先輩とのトラブル、集団活動への不適応、授業についていけないなどから、学習意欲も低下し、不登校になる生徒もいます。

中学校生活のスタートである中学1年生がスムーズに学校生活を送るためにどのような支援をしていけばよいかを考えていく必要があります。

以下に、「中1ギャップ」の原因について考えました。

##### 教科担任制

小学校の頃は学級担任が一日の大半を指導することにより、子どもの全体像をとらえ指導してきました。しかし、中学校になると担当している教科の先生が、自分の担当教科における実態を把握し、指導することになります。教科ごとに特性があるため、通常、指導方法は担当教師に任されています。そのため9教科であれば9通りの指導方法となるわけです。しかし、それぞれの教師の指導方法になじみ、その方法で学習を進めていくことに困難を示している生徒が少なくないのが現状です。

##### 教室環境

小学校の教室環境は学級担任によって創意工夫されていることが多いです。例えば、漢字の書き順が示されていたり、算数の公式がまとめられていたりするのをよく見かけます。一方、中学校は教科担任制であるため、掲示物一つとっても各教科担任・学級担任で調整が必要になることなどから、教科に関する掲示物が少ないようです。

生徒にとっては、「英語」という新しい教科が入ってきます。「b」や「d」、「i」や「j」や「l」は間違えてしまいそうです。「数学」ではxやyという英字を使用した方程式も出てきます。中学校の教室環境は生徒にとって小学校に比較して、学習に関する手がかりや情報が少ないといえます。

##### 学級集団

小学校では通級指導教室に在籍していても、中学校には学級が設置されていないなどの理由から、通常学級に在籍する場合も少なくありません。また、多くの場合、複数の小学校から進学してきます。このように、新しい環境での集団作りも課題となってきます。

##### 思春期の気持ちの揺れ

身体の急激な成長や第二性徴の発現に伴って、不安になったり、成長の個人差から周りからの反応が気になったりします。また、第二反抗期に入るため周りからの強制や干渉を嫌がる傾向が強くなります。その反面、自分に自信が持てず不安になったり、あるいは

感情を表に出すことが少なくなったりすることもあります。環境が変わることで落ち着きをなくしたり、不安感を強く感じたりする場合もあります。また、失敗が重なってしまうと自信や意欲を失い、自己評価が低下していきます。授業中も間違えることに抵抗を示し、質問したり発表したりすることに躊躇したりするようになってきます。

#### 周りの大人の対応

保護者も教師も「中学生になったのだから、自主性を尊重したい」という気持ちがあると思います。確かに、「制服を着る」「新しい学校に入学する」ことは生徒にとっての心の成長を促します。しかし、3月下旬に小学校を卒業し、4月上旬に中学校に入学するだけであり、2週間でいきなり周囲が期待するような「中学生」にはなりきれものではありません。急な「自主性の尊重」は、生徒にとって「支えの喪失感」となり、ストレスになってしまうこともあります。

## 2．支援の方向

中学校1年生の課題の中で、今回は、生徒の多くが不安を感じている学習面にスポットを当て、支援していくことにしました。

中学校での教科担任制は、見方を変えれば、利点にもなり得ます。各教科の先生方が一人一人の子どもにかかわるということは、複数の視点で生徒を見つめ、伸ばしていくことができるわけです。

生徒の実態の共通理解、支援のための基本事項の確認をした上で、発達障がいのある生徒への支援のため、教科指導中での取り組みを工夫していくことにしました。事例は、「教科担当者間の連携」「教科の専門性を生かした支援」「指導の形態(TTなど)の工夫」「教室環境の工夫」の四つの視点でまとめています。教科別の事例については、「1．支援の実際」として支援した内容を「2．今後の方向」として今後の支援への提案を掲載しています。

## 3．今後に向けて

中学1年生の多くは、人間関係や生活面に比べて学習面での不安を感じていました。しかし、一定のパターンで授業をすすめていくこと、黒板の使い方を各教科共通にすることなど、これから示す支援策を取り入れることで学習方法を理解し、集中して学習に取り組むことができるようになりました。具体的には、ノートをとることがスムーズになったり、授業のポイントをつかむことができたりして、「わかった。できた。」ということを実感し、学習に対して自信を持つようになってきました。苦手教科を克服することができた生徒もいました。

教科担任制とはいえ、担任が生徒を理解し、保護者と密な連携をとることは小学校と同じです。担任を窓口、まずは学年単位で保護者と連携をとって支援していきます。他学年の先生とは学年主任や特別支援教育コーディネーターの先生を中心に連携し、学校全体への理解へとつなげていくこともできます。さらに、部活動の顧問や特別支援教育支援員、スクールカウンセラーの支援も交え、全職員で支援していくことが大切であると考えます。

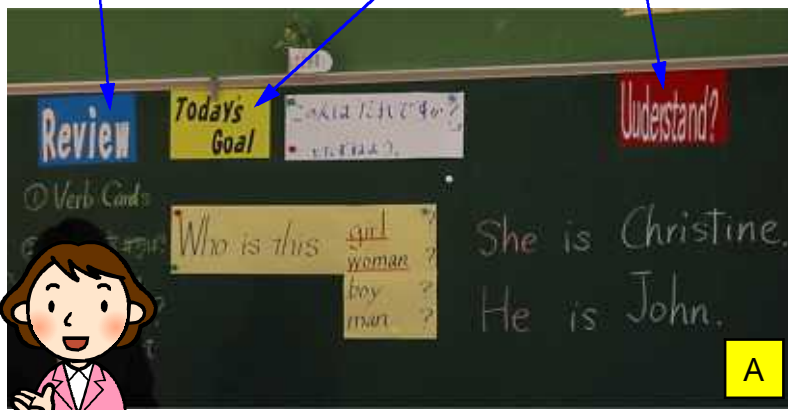
教科担任制の中学校では、それぞれの教科の先生ごとに独自の授業のすすめ方をします。このことが、発達障がいのある生徒にとっては混乱する原因になる場合もあるのです。そこで、各教科に共通する支援についてまとめました。

授業の構造化（全教科）  
 板書の構造化（全教科）  
 必要な内容は事前にカードで準備（全教科）  
 補助プリントの工夫（全教科）  
 新しい語句・単語を事前に提示（英語、国語）  
 全体扱いと個人実習の組合せ（理科、技術、家庭、美術）

### 1. 支援の実際

授業の構造化 <英語の例>

<前時の復習> <本時のポイント> <まとめ>



【黒板を3分割した板書】

<前時の復習> <本時のポイント> <まとめ>のパターンで授業を進めます。生徒は見通しを持って取り組むことができるようになりました。

黒板は、授業の流れに沿って三分割され、板書されていきます。（写真A）生徒にとって、ノートも整理しやすくなり、学習内容の定着が図られるようになりました。

板書の構造化 <理科の例>

教える先生は替わっても、安心して生徒が取り組むことができるように、板書時のチョークの色の使い方や書く場所を一定にするなど、板書時のきまり事を作りました。（写真B）

板書時のきまり

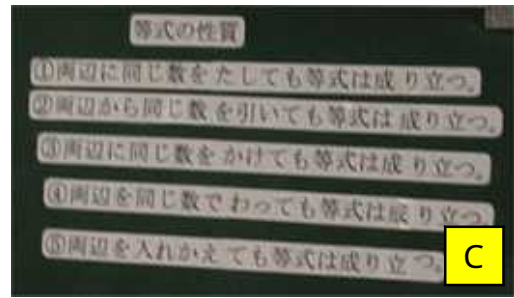
- （ア）課題やテーマは、色や枠、カード等で目立たせる
- （イ）重要な語句は黄色で書く
- （ウ）生徒に必ず写してほしいところは、水色で囲む



【きまりに沿った板書】

生徒はその時間の内容がよく分かり、ノートの整理もしやすく、安心して授業に取り組むことができていました。

必要な内容は事前にカードで準備<数学の例>  
教師が板書をすることで生徒に背中を向ける時間を減らすために、学習で扱う内容・まとめの内容などは事前にカードにしておきます。(写真C)  
生徒と対面することで、理解の様子を確認しながら授業を進めることができました。



【準備したカード】

基本となる課題を一問提示します。(写真D)



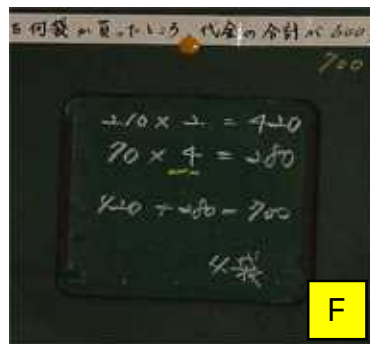
【課題を1問示す】

課題について説明した後、その問題だけがプリントされたシートを生徒に渡します。(写真E)生徒は、一度説明を聞いていることから、自分の手元に問題が来た

ときスムーズに課題に取り組むことができました。生徒が問題を解いている間に机間指導し、生徒のつまずきなどをとらえ、必要に応じて小黒板を使い、(写真F)計算途中を示すなどのきめ細かい指導をすることができました。



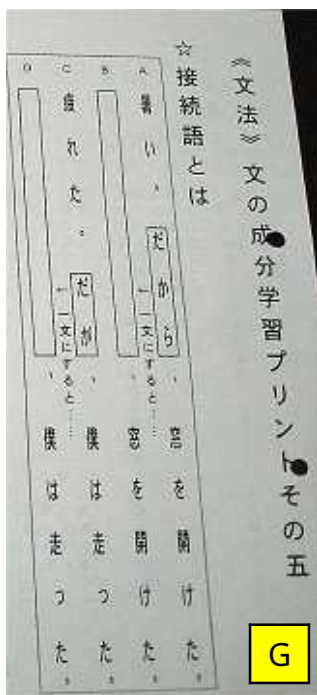
【1問だけのプリント】



【途中の計算を示す小黒板】

### 補助プリントの工夫 <国語の例>

文法の学習には、整理する力が要求されます。教師がまとめたものをプリントにして授業の始めに生徒に配付します。(写真G)そのプリントに沿って授業を進めていきます。(写真H)生徒は授業中に学習したことをプリントに記入していくこと



【黒板とリンクしているプリント】



【プリントとリンクしている黒板】

で容易にまとめができます。復習する際にもプリントを活用することができます。

また、文法はピンク、漢字は黄色というように、内容によって用紙の色を決めて作成・配付します。そうすることで、生徒の資料を整理する力を育てることもつながっていきます。



新しい語句・単語を事前に提示 <英語の例>

次の単元の単語カードを渡し、発音と意味の指導をします。発音が難しい単語があったときには、生徒は自分で読み方をカタカナで書きます。国語の時間に漢字に読み仮名を書くことで安心にして文章を読むことができるように、英単語に読み方を書くことで安心感をもたせることができました、毎時間、授業開始直後1分交替で、隣の席の生徒とペア学習をします。単語カードを見ながら、一人の生徒が読みます。ペアの生徒は、読みが正しいかどうかを判定します。(写真I)互いに認め合い、教え合い、意欲的に取り組むことができました。また、単語の発音ができると、自分から読み方を消していくようになりました。



【ペアで単語を読み合う生徒】

この方法は、単語を予習しておくことで、次の単元に入ったとき、単語の学習に時間を取られずに、スムーズに本文に入れるという利点があります。また、短期間に集中して覚え、後は繰り返し復習することが効果的であると考えられます。

全体扱いと個人実習の組合せ <理科の例>

ア：課題提示

簡潔に課題提示をすることにより、本時の学習内容を把握します。



課題提示

イ：全体扱い

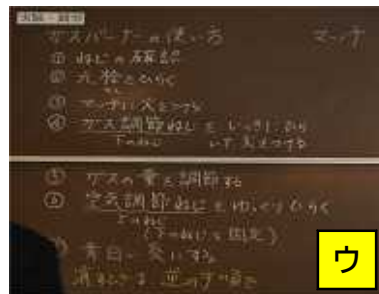
説明を加えながら教師が実験を提示します。生徒は、モデルを見ることにより手順を理解します。



全体扱い

ウ：確認のための板書

説明した内容を板書し、確認します。見たことを文字にして提示されることにより手順が整理されます。



確認のためのまとめ

エ：各自の実習

その後、各自の実習に入ります。途中で方法が分からなくなったときには黒板で確認したり、支援員に質問したりします。



各自の実習

オ：まとめ

「見て学ぶ」「文字で整理して学ぶ」「実際にやってみて学ぶ」「やってみて分からないことは質問する」というように一時間の中で繰り返し試行することができます。この学習方法は生徒の学習の定着に有効であるといえます。

まとめ



## 2. 今後に向けて

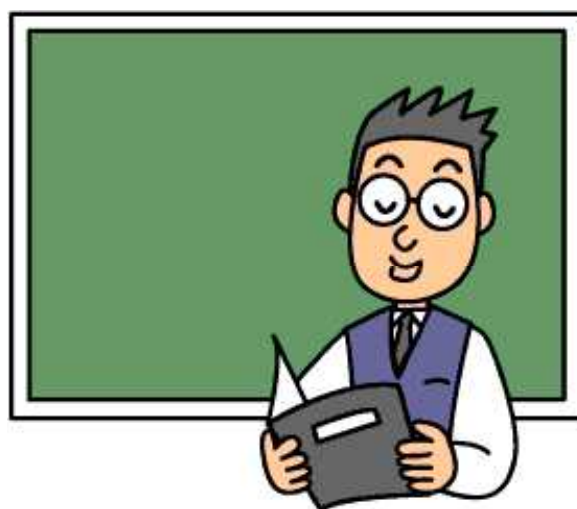
今回の取り組みは、昨年度末の「小・中連絡会」で支援が必要な生徒が入学するという情報をうけ、新年度の職員会議で、チームティーチング（以後TTとする）での学習指導を中心に柔軟に対応をとってきた学校のものでした。

今できることは何かということを考え職員会議で確認しながら進め、基本的には、全ての教科でTTが行えるようにしました。また、支援員が配置されることにより、校内支援体制は更に充実していきました。

教科の専門性がある中学校でTTを導入するということは、自分の専門外の授業で支援教員（以後T<sub>2</sub>とする）を務めるということです。小学校との情報交換や中学校のそれぞれの先生方の共通理解なくしてはできない取組でした。

「授業の構造化（全教科）」、「板書時の構造化（全教科）」を図ることは、生徒の思考の道筋を示すことにつながります。構造化された授業の内容を板書することで、生徒は思考の流れを視覚的に捉えることができ、振り返りにも有効です。また、授業の中心課題や確認事項が全ての教科で統一されることから、専門外の教師がT<sub>2</sub>で入ってもすぐに授業の状況がつかめます。そのため、主指導教員（以後T<sub>1</sub>とする）とT<sub>2</sub>との打ち合わせ時間が短縮されました。この方法は取り入れやすく支援の方法としては有効でした。また、担当教科以外の授業にふれる機会が増えることで、自分の授業以外の生徒の様子を見ることができます。このことにより、生徒に対する共通理解が深まるとともに支援の修正へとつながっていきました。

このような支援の結果をしていくことで、生徒は授業における学習方法を理解し、集中して学習に取り組むことができるようになりました。その結果、苦手教科を克服することができた生徒もいました。しかし、教科によっては学習の習熟度に差が生じてきているものもあります。個別の支援が必要になってくることも考えられます。その際にも、教科ごとで考えるのではなく、情報交換をして共通理解のもと、体制を整えていくことが必要になってきます。



【 国語編 】 文章を正確に読み取り内容を理解するため、視覚的な手がかりを用いる

1. 支援の実際

- (1) 学習プリントを工夫し、ポイントをはっきり示す
- (2) 視覚的な手がかりを用いる

(1) 学習プリントを工夫し、ポイントをはっきり示す

本時で学習する内容を1枚のプリントにまとめ、授業の始めに生徒に配付しました。生徒にとってはその時間に学習する内容についての見通しがもて、集中して取り組めると考えました。重要な語句や覚えてほしい語句、新出漢字等を( )で抜き、穴埋め式にして、自分で記入するようにしました。そうすることで、授業や教科書のポイントがつかみやすくなりました。また、生徒が、家庭学習の際に、学習のポイントをつかみやすくなり、復習をするのに役立ちました。

(2) 視覚的な手がかりを用いる

文章の読み取りが苦手な生徒に対して文字を正しく認識させ、正しい文節で読めるようにするために、文節の切れ目にスラッシュを入れたり、単語を丸で囲んだりしました。また、読む行や文字に集中させるために2～3行だけ見えるような枠を作ったり、他の行を隠すために用紙を置いたりして、読みやすくしました。

国語の文章中には、主語、述語、修飾語等がたくさん出てきます。それらが、新出した際に知識としては断片的に覚えられますが、文章中で使用されたときは、その特徴や品詞の関係がとらえにくいときもあります。そこで、単語を丸で囲み、文節を赤で区切り、主語を黄色、述語を青と決めたり、品詞ごとに色分けをしたりする等視覚的な手がかりを用いました。そうすることで、文章の読み取りが苦手な生徒は品詞の特徴や関係を系統的に覚えられたり、文節の切れ目が理解できたり、文字を正しく認識することができたり、似たような漢字の読み間違いを少なくしたりすることができました。

には、 色あせ た湖が、 丘の多 い岸に 靱く縁	明るさは 消えうせ ようとして いた。窓 の外	斎でわた しのそば に腰掛け ていた。/ 昼間の	客は夕 方の散 歩から帰 って、わ たしの書	少年の日の思い出 ヘルマン・ヘッセ 高橋健二・訳
---	-------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	--------------------------------

【スラッシュを入れて読みやすくした文章】

2. 今後に向けて

国語の学習では文章の読み取りが大切です。そのためにも、文字を正しく認識できるように支援していくことが大切です。文章を読み取りやすくするために、拡大コピーをしてフォントを大きくしたり、読めない漢字にルビをふったりします。また、行間を広くしたプリントを作成していくことで読み間違いを少なくしていくことができます。

文章を書くときは、教師と一緒に出来事を思い出したり、示された参考文を例にしたりしながら書き、自分で書く量を増やしていき、書くことへの抵抗感を減らしていくことが大切です。書く量が増えていくことで、生徒も自信をもつことができます。

## 【社会編】 板書とプリントを併用し、何を考えればよいかを明確にする

### 1. 支援の実際

- (1) 板書の工夫
- (2) 補助プリントの工夫

#### (1) 板書の工夫

1時間の内容を1枚の黒板内に収める

1時間の授業の中で、黒板を何度も消して書くのではなく、黒板1枚で済むように、板書の仕方を工夫しました。そうすることで、書くのが遅い生徒も板書を消される心配がなく、安心して自分のスピードで書き写せると考えました。

実際、生徒の書き写すスピードはまちまちですが、それまで先生に言われてからノートを取っていた生徒も、自分から板書を見て書き写すようになってきました。

生徒が考えるところを空白にする

先生が説明したことを順番に板書するのではなく、覚えてほしい語句などの部分を空白にして、後からチョークの色を変えて書き込むようにしました。(写真A) そうすることで、今どこを見て何を考えればよいのかがわかるようにしました。

生徒から、「( )や下線で考えるところが示されているのでわかりやすい」との感想がありました。

#### (2) 補助プリントの工夫

本時の内容を1枚のプリントにまとめる

その時間に学習する内容を1枚のプリントにまとめ、授業の始めに生徒に配付しました。そうすることで、その時間にすることの見通しが持て、集中して取り組めると考えました。

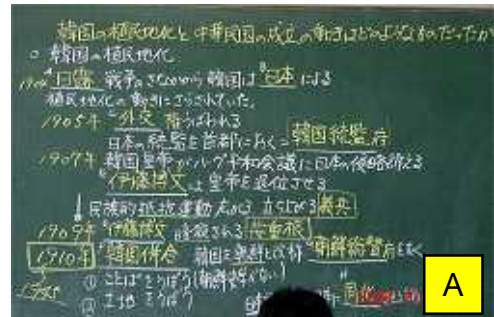
重要な語句を( )で抜き、自分で記入する

プリントには全てを記述するのではなく、覚えてほしい語句、重要な出来事などを( )で抜き、穴埋め式にしました。また、資料などを多く載せ、板書の補助になるように作りました。(写真B) そうすることで、授業を構造的に組み立てられると同時に視覚的に授業のポイントがわかると考えました。

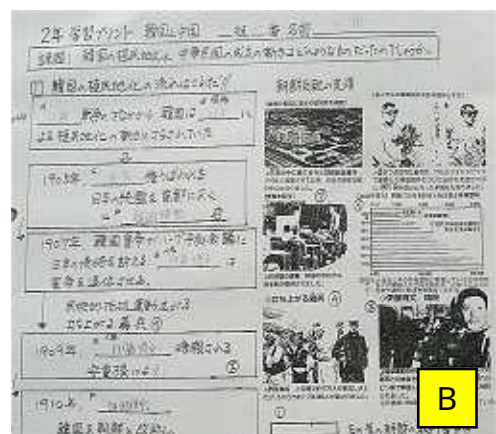
生徒に尋ねると、「どこをやっているかわかりやすい」との意見が多く、先生が板書している間も、自分で教科書をめくって答えを探すなど、積極的に取り組んでいる姿が見られました。

### 2. 今後に向けて

板書とプリントを併用する仕方は、どの生徒にもとても有効だと思います。そのプリントに教科書や資料集のページが書いてあると、今どここの内容をやっているのかわかりやすく、また、後から見直すときにも役立ちます。



【考えるところを下線で示した板書】



【板書とリンクしたプリント】

## 1. 支援の実際

- (1) 易から難への問題の提示  
 (2) 本時のまとめ(学習ポイント)の掲示

### (1) 易から難への問題の提示

教師が課題を提示し、その内容をしっかり確認するようにしました。そうすることで、生徒は、この時間内で、何について学習するのかを理解することができました。何について学習するのかがわかった生徒は、課題の解き方を考えます。次に、生徒の考えをまとめ、教師が本時の学習ポイントを示します。それを受けて、生徒は練習問題に取り組みます。その後、練習問題は基本の問題数を提示して、自分でできる範囲を考えて応用問題に取り組みました。

これにより、生徒は、課題をしっかりと引き受けることができ、自分のペースで問題を解くことができるようになりました。

### (2) 本時のまとめ(学習ポイント)の掲示

T<sub>2</sub>が、T<sub>1</sub>によって板書された本時のまとめ(学習ポイント)を1枚の紙にまとめました。その紙を教室の一角に常時、数学コーナーとして掲示しました。そうすることで、数学コーナーの掲示を見れば、単元や題材の学習内容が一目で振り返ることができるようにしました。また、問題集を解きながら、解き方がわからなくなったとき、数学コーナーの掲示を見ることで、問題の解き方をつかむことができました。その結果、自分一人で学習をすすめられるようになりました。T<sub>2</sub>は、机間指導しながら、生徒がつまづいている箇所を確認しながら、本時のまとめを書き写しました。つまづきの解決策を取り入れた本時のまとめ(学習ポイント)を時間内に書き上げることで、生徒の理解を促進することができました。あわせて教師の負担も軽減することができました。

【本時のまとめ(学習ポイント)】



【数学コーナー掲示(年間を通して掲示する)】

## 2. 今後に向けて

方程式を理解するために天秤図を使って図解にしたり、立体の具体物を操作する等、視覚的な情報を提示すると理解しやすいと考えられます。例題を出すときは、できるだけシンプルな問題を出題し、生徒全員が解答できるようにして、自信を持たせることが大切です。数学という教科の特性上、習熟度に差が生じてくると考えられますが、TTで適切な連携を図りながら、生徒の実態に合わせた問題の解き方や要点をおさえていくこと等、細かな学習の支援を行うことが大切です。



【 理科編 】 本時の課題を示し、内容のまとまりで板書をする

1. 支援の実際

板書の工夫

板書の工夫

本時の課題をわかりやすく示し、その時間中掲げておく

まず、最初に本時の課題を黒板の左上に示し、その時間中消さないようにしました。そうすることで、生徒にとっては何について学習しているのかがわかりやすくなりますし、途中でいつでも振り返ることができると思いました。

生徒に何の勉強をしているのかを尋ねると、すぐに答えたり、悩んだ生徒も黒板の左上を見て答えたりしました。(写真A)このことから、生徒が課題をしっかりと引き受けて取り組んでいること、わからなくても黒板の左上を見ればよいという安心感を持って取り組んでいる事がわかりました。

内容ごとにまとめて板書する

理科の場合、例えば、『行動するしくみ』では、一つの単元で『骨格』『筋肉』というように複数の内容が含まれています。また、『消化系』では、食道や胃、小腸、大腸、肝臓や脾臓など多くの器官があります。そこで、生徒が混乱しないように、〔じん臓のはたらき〕などと内容ごとにまとまりを作って板書をするようにしました。(写真B、C)

生徒に尋ねると、「まとまっていてわかりやすい」という感想が聞かれました。

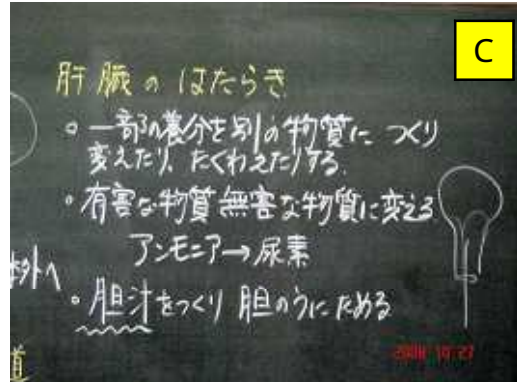
2. 今後に向けて

教科書の図や資料等でも理解しにくいものは、実物を用いて説明するとよいでしょう。例えば、『消化された栄養分の吸収』を説明するとき、ふるい(ザル)を使って、粒の大きいものと小さいものを用意し、ふるいの目を通過する様子を見せます。粒が粗いと吸収(通過)できず、粒が細かいと吸収(通過)されることを説明します。

また、教科書に掲載されている 実験 や トライ などに取り上げられている内容を実際に行うなど、体験的な活動を多く取り入れることで、生徒は授業に興味を持ち、学習内容をより効果的に習得できるのではないかと思います。



【課題を示している板書】



【内容のまとまりで示した板書】



【 英語編 】 学習の楽しさが実感できるようにする、TTによる取組

1. 支援の実際

- (1) 定型化した学習過程を板書に示す
- (2) TTによる支援
- (3) 教材提示の工夫

(1) 定型化した学習過程を板書に示す

学習過程を定型化し、それに沿った板書の仕方を工夫しました。前時の復習を青のマグネットシートの下に示します。今日の課題を赤のマグネットシートの下に書きます。本時のまとめを黄色のシートの下に示すようにしました。そうすることで、生徒は、学習の流れがわかり、課題や本時のまとめ（学習のまとめ）がつかみやすくなりました。



【前時の復習】



【今日の課題】



【今日のまとめ】

(2) TTによる支援

初めて英語学習に取り組む生徒にとって、英語の楽しさを味わうことで英語に対する抵抗感を少なくできるのではないかと考えました。そこで、T<sub>2</sub>も一緒に学習に参加し、ともに声を出し合い、聞き合いながら活動を楽しむように心がけました。T<sub>2</sub>も生徒と同じように、T<sub>1</sub>の質問に答えました。生徒と同じ視点に立ち、時にはT<sub>2</sub>が間違えることもありました。生徒は「間違っても大丈夫なんだ」という安心感をもって学習に取り組むことができたようです。英会話にはリズムが大切です。会話のリズムを取るためにメトロノームを活用しました。T<sub>1</sub>・T<sub>2</sub>・生徒全員でメトロノームのテンポに合わせて声を出し、会話文の練習をしました。そうすることで、一人では恥ずかしくて声を出しにくい生徒も、他の生徒・T<sub>2</sub>ともにリズムに合わせて声を出すことができるようになりました。



【T<sub>2</sub>も一緒にメトロノームを使った会話文の練習】

(3) 教材提示の工夫

英語コーナーの掲示

アルファベットを覚えるのが苦手な生徒たちのために、アルファベットの一覧表を常時掲示しました。そうすることで、生徒たちは、単語を書きながら、アルファベットがわからなくなったときに英語コーナーのアルファベット一覧表を見て、すぐに書けるようになりました。



【常時掲示しているアルファベット一覧表】

また、生徒に配布するプリント類は、通常使用されるアルファベットではなく、教科書で使うフォントを使用することで、生徒の間違いを少なくすることができました。

(一般的なフォント) (Comic SansMS)

a	a
g	g

【アルファベットのフォントの違い】

本時のまとめ(学習ポイント)や間違いやすいところを紙にまとめて、英語コーナーとして常時掲示しました。そうすることで、英語コーナーを見れば、単元や題材の学習内容で大切なところが一目でわかるようになりました。



【単元の内容】



【つまづきやすいところ】

本時のまとめ(学習のポイント)学習のポイントをOHPで示す

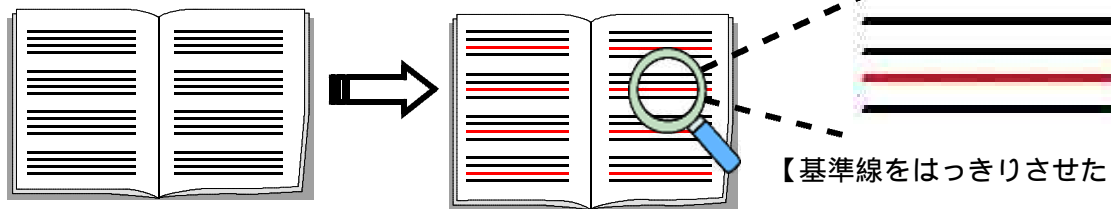
本時のまとめ(学習のポイント)をするときは、教科書に掲載されている学習のポイントをOHPを活用して確認しました。OHPには、ポイントの部分を隠して提示します。そうすることで、生徒は本時のまとめを視覚的につかむことができました。復習する際は、本時のまとめに沿ってどこが大切なのかを理解し、振り返りに役立ちました。

This is Daichi.  
 [ ] is my friend in Okinawa.  
 [ ] is a singer [ ] folk songs.  
 This is Yuri. [ ] is my friend too.  
 [ ] is [ ] Eisa dancer.  
 [ ] is in the dance club.

【ポイントの部分を隠して提示した教科書】

ノートの工夫

ノートは、基準線をはっきりさせたものを使用しました。基準線をはっきりすると、どこからスペルを書き始めればよいのかがわかるようになりました。



【基準線をはっきりさせたノート】

## 2. 今後に向けて

英語の学習では、まず発音に慣れさせることが大切です。英語の聞き間違いによって意味が分からずに興味や関心を失うことがないようにするためにも、英語ならではの決まった言い方や会話の暗唱等基本的な表現の習得ができるようにしましょう。そして、楽しく英語に親しむことができるように様々な活動を取り入れていくことが重要です。

## 【音楽編】 音階の配列を理解するために、色などの視覚的な手がかりを用いる

### 1. 支援の実際

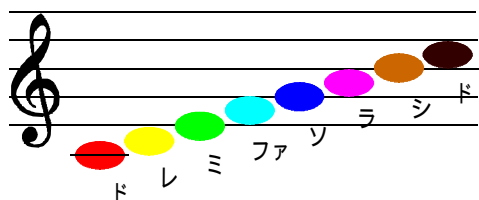
(1) 視覚的な手がかりを用いる

(2) 吹き方の強さを示したり、吹く音を限定したりする

#### (1) 視覚的な手がかりを用いる

小学校のときとは違って、中学校では楽譜が複雑になり、歌唱等では自分の歌うところを把握することが難しくなります。自分の歌うところを把握するのが苦手な生徒には、マーカー等を用いて目立つようにしました。そうすることで、生徒は、自分がどこを歌うのかを把握でき、自信をもって活動に取り組むことができるようになりました。

また、楽譜を見て楽器の演奏するときは、音符に色をつけて、一目ではっきりと何の音を演奏するのかがわかるようにしました。同じ色を楽器の鍵盤にもつけておくことで、楽譜と鍵盤とを見比べながら、演奏することができました。



【色で示した音階】



【色音階と対応させて色シールを貼った鍵盤】

#### (2) 吹き方の強さを示したり、吹く音を限定したりする

アルトリコーダーの演奏は、指先を細く動かしたり、息の量を調節したりしながら、友だちと協調的な動作が求められます。そのため、拡大した運指表を掲示して練習をするようにしました。また、吹く強さについては、教師が見本を示し、練習に取り組みました。そうすることで、どの指を動かせばよいのか、どのくらいの強さで吹けばよいのかを具体的に理解することができました。また、一人で演奏することができても、他の生徒と一緒に演奏すると困難を示す生徒には、楽譜をアレンジして演奏する音を減らす等しました。生徒の困りを軽減した練習をしていくことで、演奏することに自信をもち、楽しく活動に取り組むことができるようになりました。

### 2. 今後に向けて

演奏や歌唱活動に具体的にイメージできるようにしながら見本を示し、練習をすることで、生徒は活動に見通しをもつことができます。生徒にとって難しい活動は、具体的な手順を示したり、方法を伝えることが大切です。また、具体的な方法を伝える際に、わかりやすい言葉で示すことによってどんな仕方をすればよいのかを理解できるようになります。生徒が活動内容を容易に理解できるようにしておくことで、楽しく活動に取り組むことができるのです。

【 体育編 】 動き方の理解のために、活動内容を具体的な言葉で示す

1 . 支援の実際

- ( 1 ) 基準の高さを決めたり、動き方を図示・言葉で示したりする
- ( 2 ) 安心して活動に取り組むために、活動の内容を事前に知らせる

( 1 ) 基準の高さを決めたり、動き方を図示・言葉で示したりする

バレーボール等のボール運動を行う際、自分の方に向かってボールが来たときに、ボールを打つことが苦手な生徒に対して、基準の高さを決めて、どんな打ち方をすればよいのかを知らせました。例えば目線より高い時は、手のひらを上に（オーバーハンド）して打ち、目線より低い場合は手のひらを下に（アンダーハンド）して打つように伝えました。どちらがよいのか判断が苦手な生徒には、手に持ったボールを目線の高さにもっていき、どちらの打ち方をすればよいのかを判断させるようにしました。個別練習の際も教師がボールの打ち方や扱い方を支援していくことで、そのコツをつかませるようにしました。そうすることで、みんなと同じ動きができるようになり、自信をもって運動に取り組むことができるようになりました。

また、ボール運動にはパスされたボールの処理があります。パスをされて後、次にどう動けばよいのかをとっさに判断することが苦手な生徒には、パスされた後の動き方を図示しました。これにより生徒は、ボールをパスされても安心して、次の動きに移ることができるようになりました。

( 2 ) 安心して活動に取り組むために、活動の内容を事前に知らせる

体育の授業は、取り組む内容によって活動する場所がかわってきます。そのため、授業の内容や場所がわかっていないと不安が先行してしまい、授業に合流することが苦手な生徒もいます。そこで、授業の場所や時間内にすること等を事前に知らせておくようにすると、生徒は安心して授業に取り組めるようになります。

また、跳び箱運動等では、実際にどんな動きをするのかについてや体の状態がどうなっているのかをビデオ映像等で具体的に見せ、イメージをもたせておくことで、生徒に恐怖感をもたせない支援も大切です。ビデオ映像等を活用することは、自分が運動しているときの姿を振り返ることにも役立ち、どこに気をつけて練習すればよいのか、教師のアドバイスを理解することに役立ちました。

2 . 今後に向けて

どんな動きをすればよいのかを具体的に示されることで、イメージがつくられ安心して活動に取り組むことができます。生徒にとって苦手な内容がある場合は、具体的な手順を示したり、できるようになったことをスモールステップで評価し支援していくことが大切です。体育の場合、取り組む内容によって生徒が恐怖感をもってしまう場合も少なくありません。苦手意識と恐怖感をもたせないようにするために、教師が活動についての十分な説明と、できることを積み重ねることにより、安心して活動に取り組むことができます。

**【 技術・家庭編 】 具体的なイメージがもてるように完成品を提示する**

1. 支援の実際

- ( 1 ) 完成品を提示する
- ( 2 ) 実際の大きさの型紙を使う

( 1 ) 完成品を提示する

完成した作品のイメージをもちにくく、製作する作品の設計図を描くことが難しい生徒には、完成品や部品そのものを提示しました。また、製作の順番を提示して、順番に沿って部品を提示する工夫をしました。そうすることで、生徒が見通しを持って製作することができると思いました。



【実際に生徒が製作した完成品】

生徒は、今作っている作品と完成品を見比べながら、完成までどこを作っていけばよいのかや時間はどれくらいかかりそうなのか等、見通しを持って製作に取り組むことができました。

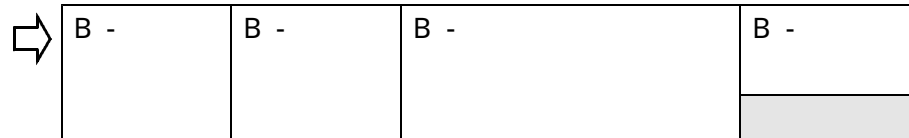
( 2 ) 実際の大きさの型紙を使う

本棚を製作する際、寸法を測りながら、1枚の板に部品の何枚分かのけがきを描いていくことがあります。しかし、1枚の板にどのように部品の設計図を描いてよいのかをイメージすることの難しい生徒には、実物と同じ寸法の型紙を用意しました。そうすることで、その型紙を1枚の板の上に置き、どのように部品の設計図を描いていけばよいのかを理解することができました。

生徒たちは、完成品と見比べながら、今作っている部品が、完成図のどこに使われるものになるのか具体的にイメージしながら、けがきをして製作していくことができました。



【実物と同じ寸法の型紙】



【板に型紙を並べる】

2. 今後に向けて

作品を具体的にイメージしながら、製作できるようにしておくことで、生徒は活動に見通しをもつことができます。具体的な手順表等を使用し、作業することをとおして、生徒が見通しをもち製作活動に取り組んでいくようにしていくことが大切です。



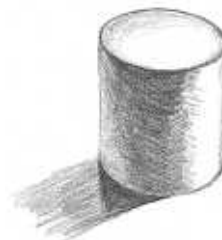
【美術編】 描かれた絵を参考にして、言葉で技法を説明する

1. 支援の実際

- (1) 完成図を参考にする
- (2) 言葉で技法を説明する

(1) 完成図を参考にする

立体物を見て写生することが苦手な生徒には、実際に目的の立体物を平面に描いた作品を見せました。そのことで、生徒は、完成図をイメージしやすくなり、目的の静物の明暗のコントラストの場所や、どんな技法を使って描いたりするのがよいのか等を完成図と見比べながら見通しを持って取り組むことができました。



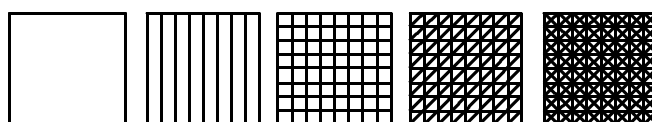
【描き方の見本】

(2) 言葉で技法を説明する

影などの明暗のコントラストをつける技法を説明する際、実際に描かれたものを見せることに加えて、言葉で技法の説明をしていきました。

例えば、影を描く場合、縦に線を引く 横に線を引く 右から左に斜めに線を引く 左から右に斜めに線を引く等を説明しました。(下図参照)

そうすることで、技法はわかるけれども実際にどのように描いていけばよいのかイメージできにくい生徒にとって、言葉で説明を聞きながら、順番に描いていくことができました。



【描いていく順番】

生徒が、どんな技法を使えばよいのかが見つけられないときも、先生が「この描き方で描くといいよ」等指定してあげることで、生徒は描きやすくなりました。

また、T<sub>2</sub>も生徒と一緒に描きました。中には絵を描くのが苦手なT<sub>2</sub>もいます。お互いに作品を見せ合いながら、失敗を恐れることなく、ともに楽しく活動に取り組むことができました。

2. 今後に向けて

作品を具体的にイメージしながら描画・製作できるようにすることで、生徒は活動に見通しをもつことができます。取り組む作業内容が生徒にとって難しい場合は、具体的な手順を示したり、方法を伝えたりしていくことが大切です。また、具体的な方法を伝える際に、わかりやすい言葉で示すことによってどんな活動をすればよいのかを理解できるようになります。生徒にどんな活動をしていけばよいのかを短時間で理解できるようにしておくことで、楽しく活動に取り組むことができるのです。

## 【各教科の連携】 教科担任連携シートの工夫

各教科の先生方が共通理解をもとに、教科特有の工夫を加え指導に当たってきました。教科担任制ではありますが、常に生徒の全体像をとらえながらの指導が必要であると考え、そのための工夫をまとめました。

- ・ 提案授業により互いの授業を知る
- ・ 教科担任連携シートの作成

### 1．支援の実際

- ・ 校内提案授業を行い、授業研究会で気づいたことを確認する
- ・ 教科ごとに研修会を開き、教材研究の充実を図る
- ・ 『教科担任連携シート』(p.27掲載)に記入することにより、一人一人の生徒の全体像をとらえて指導する

### 2．今後に向けて

校内提案授業・小中合同提案授業・授業研究会・情報交換会・教材研究などにより、教科ごとの指導の充実がなされてきました。構造化した授業を全教科で実践し、授業の質を高めることにより教科指導の充実がなされました。その結果、生徒の意欲を高め、学習への取組の改善へとつなげることができました。

認知特性の偏りがある生徒の場合は、一教科だけでは生徒の全体像をつかむことが難しいといえます。そこで、1枚のシートに全教科の指導の状況(生徒の変容)をまとめ、共通理解することで今後の各教科における支援に生かすことができると考えました。

生徒の全体像を把握するために、一学期は各教科における実態を担当者が提出したものを特別支援教育コーディネーターが1枚のシートにまとめました。5月に実施(p.26掲載・シート左側)したのですが、困難な状態が多く示されていることが分かります。

二学期は特別支援教育コーディネーターが1枚の記入枠を提示し、各教科の担当者が記入することにしました。先生方自身が記入することにより、記入の際に他の教科の状況も自然と注目でき、理解されます。この方法は、記入しやすい、使いやすい、管理しやすいという視点からも有効であると考えられます。これは、二学期末の12月に実施したものです。一・二学期(p.26掲載・シート右側)の支援によって、生徒がどのように変容したのかがわかります。また、記入された文章を見比べると、一学期が否定的な表現が多いのに対して、二学期は肯定的な表現になっています。このことは、「ができない」ではなく、「こんなことができる」というように、先生方のとらえ方も肯定的になっていると考えられます。肯定的に生徒を見ると、次の指導内容も明確になり、ステップを追った指導が可能になります。

今回は、教科毎の枠を提示し複数の生徒の学習の様子を記入しました。今後は、生徒一人に1枚のシートを作成していくとよいと考えています。この『教科担任連携シート』(p.27掲載)を引き継ぐことにより、1年生から2・3年生へと生徒の学びを一層保証できる

ものになっていくのではないかと考えています。この個人シートは、個別の指導計画につなげていくことができるものと考えられます。

また、「生徒の実態を把握したり、次の学年につなげたりしていくための客観的な項目があるとよい」という意見がありました。そこで、生徒の困難な状態に関して最初の気づきを明確にすることができる「LDI-R」を紹介しました。

本来、「LDI-R」は、基礎的学力（聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する、英語、数学）と行動、社会性の計10領域から構成されています。LD（学習障がい）のある子どもが示すことが多い特徴をみることによってLDの可能性の有無を調べる検査です。この調査票の項目を検討したところ、支援を必要としている生徒の客観的な実態把握に適すると考えました。調査票に記入した結果、10領域の各々のシートが今の生徒の実態を客観的に示し、共通理解に役立つものといえます。

一冊の調査票に、1年生の時の実態は黒ペンで記し、2年生の時の実態は赤ペン、3年生の時の実態は青ペンというように、学年ごとに記入する色を決めて記入します。その際、数値を線をつないでいくと、プロフィールのようになり、生徒の変容を視覚的にとらえることができます。客観的で、視覚的であることから引き継ぎ資料として有効に活用できるものと考えられます。

<LDI-Rシートの活用例>

記入の際は	1年：黒 2年：赤 3年：青	で行う	ない まれにある ときどきある よくある	
1. とても早口である。.....	1	2	3	4
2. ひらがなを間違えて書く。.....	1	2	3	4
3. 授業中に席を立ったり、歩き回ったりする。.....	1	2	3	4

【 教科担任連携シート実践例 】

教科	学習の様子(実態・困難な状態) - 5月段階 -	12月での様子(変容など)
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長文でじっくり考えることが苦手</li> <li>・「めんどくさい」等独り言を言う</li> <li>・注意すると腹を立てプリント等を破るなどするので、授業が中断する(T、H)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・我慢強くなった(T、H)</li> <li>・考える時間が長くなり、発表もするようになった</li> <li>・長文でも物事についてよく考えるし、集中できるようになった</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中力に欠ける</li> <li>・人の話を聴かない...聞き逃す、手遊び(G)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中力が続くようになり、学習意欲が見受けられる。</li> <li>・学習の規律が身についてきた</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「できん」、「無理や」といったことが多い</li> <li>・学習規律(話を聴く、けじめ)がない</li> <li>・基礎基本、特に計算力の定着が図れない (G、H、T)</li> <li>・授業でできたことが一週間後には抜けている</li> <li>・できないという意識(N)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粘り強く取り組めるようになった</li> <li>・学習意欲が見受けられる</li> <li>・学習規律が身についてきた</li> <li>・文章題に対しては非常に消極的。まだ、できないという意識が強い</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特にはないが、進度が例年より遅い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1分野の実験にとっても意欲的に取り組むことができた</li> <li>・まだ、実験の結果からの考察は苦手である</li> </ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書を読めない(字を読めない)</li> <li>・ノートに書く時間が他の人よりもかかる(差が大きい)</li> <li>・ペア活動がうまくいかない(会話にならない) (N、G)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分でフリガナをつけることができるので時間をあげれば読めるようになった</li> <li>・ミスをしないように注意して書けるようになった(差がなくなった)</li> <li>・Gはペア活動ができるようになった (T、Nは支援が必要)</li> </ul>
音楽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机に向かってノートをとったり感想を書いたりするとき集中できない</li> <li>・リコーダーなど技能面で練習が続かずに、すぐあきらめてしまう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援員の援助もあり、少しずつ集中できるようになってきた</li> <li>・リコーダーも時間はかかるが意欲的に練習するようになった</li> </ul>
保健 体育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中力不足</li> <li>・飽きっぽい、粘りが無い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少しずつ我慢強さや粘り強さが出てきた</li> <li>・集中しようとする気持ちが見え始めてきた</li> </ul>
美術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業中私語が多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意欲を持って取り組むようになった</li> <li>・私語は、美術に関するもの以外なくなった</li> </ul>
技術 家庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中力がない</li> <li>・問題が解けないときやわからないことをすぐ先生に質問する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだまだ、主体的な学習は未熟であるが、少しずつ考えようとしてきた</li> <li>・作品は、全員が作り上げることができた</li> </ul>
道徳 学活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読み物教材が苦手</li> <li>・じっくり考えることが苦手</li> <li>・指示されたことができない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容が分かるもの(心情面)であれば読み物教材をじっくり聴き、考える</li> <li>・指示が通るようになった</li> </ul>

## 【教科担任連携シート様式】

〔 〕年〔 〕組 氏名〔 〕

教科	学習の様子(実態・困難な状態)	学習の様子(実態・困難な状態・変容)		
	年度はじめ	1学期末	2学期末	3学期末
国語				
社会				
数学				
理科				
英語				
音楽				
保健 体育				
美術				
技術 ・ 家庭				
道徳				
学級 活動				



【教科担任連携シート記入例】

[ ]年[ ]組 氏名[ ]

教科	学習の様子(実態・困難な状態)		学習の様子(実態・困難な状態・変容)	
	年度はじめ	1学期末	2学期末	3学期末
国語	・新出漢字全てふりがなをつけることにより、安心して読むことができる	・各単元の前に漢字学習の時間を取り入れ、漢字の小テストで定着を図ることができた	・本文の同じ内容の映画や漫画を見ることにより、全体像をつかんで長文を読解することができるようになった	・文章構成図にまとめることで、長文の読解ができるようになった
社会	・各時代の内容は理解できるが、通史を時間的な概念として理解することが難しい	・歴史年表を作り、前後の時代について復習することで、時代の流れを捉えることができるようになった	・歴史に興味を持ち、歴史の資料集も活用することができるようになってきた	・歴史に興味をもって、地域にある文化財や歴史遺産に関心を向け自分で調べるようになった
数学	・計算は得意 ・文章題の読解に課題がある	・文章問題を図解して示すことにより、読解し問題を解くことができるようになった	・課題量を調整し、途中で励ましのことばかけにより、自分一人で課題に取り組むようになった	・方程式については、個別に説明が必要である
理科	・実験の際、ことばだけの説明では理解が難しい。	・実験の際、図を示したり師範することにより理解を促すことができた	・1分野の実験に対して、意欲的に取り組むことができるようになった	・実験の結果から考察につなげることが難しい
英語	・本文全てに読み方を書くことにより安心して読むことができる	・各単元の前に単語学習の時間を取り入れ、小テストで定着を図ることができた	・自分で読み方を書くことができるようになった ・綴りのミスが減少した	・ペア学習が定着してきた(会話や単語学習など)
音楽				
保健 体育				
美術				
技術 ・ 家庭				
道徳				
学級 活動				

《 実態の記入のポイント 》

肯定的な表現で書く

「何が」「どこまで」「どの程度できる」

できたときの状況を書く

例) 横に支援員がいて細かな指示があった

一斉授業でできた、少人数のグループでできた

《 困難な状態の記入のポイント 》

生徒の困難な状態が具体的にわかるように書く

《 変容記入のポイント 》

支援+変化を書く

毎時間ごとの学習内容をプリントにし、配布することで生徒の思考を視覚的に捉え、確認させることができた。このことは、学習の定着に繋がった。

### 3 小学校と中学校との連携

#### 小・中連携シートの活用をめざして

##### 学校間の連携の必要性

近年、「小1プロブレム<sup>\*1</sup>」「中1ギャップ<sup>\*2</sup>」ということばがあるように、保育所・幼稚園から小学校へ、小学校から中学校へのなめらかな接続が求められています。

昨年度の研究では、小学校から中学校へ伝えることが必要な内容を書面にまとめて連携を図ることが大切であると考え、『連携シート』を提案しました。『連携シート』の作成にあたっては、小学校の管理職等から寄せられた意見を参考にして、連携を図る内容を検討しました。提示した記入例は、小学校の特別支援学級のもの参考にしてあります。

今年度、記入例のシートを多くの中学校の先生方に見てもらいました。中学校の先生方からは、「生徒の全体像はつかめる」「どの教科がどこまで習得できているのか知りたい」「履修していない教科、単元を知りたい」「小学校からの資料では までではできると書いてあったが、取り組んでみるとできないことが多い。小学校の時、どんな状況でできていたのか（支援員の有無、一斉授業なのか個別指導等）を知りたい」「小学校の頃の特別支援教育支援員やT<sub>2</sub>の付き方を知りたい」などの意見がありました。

中学校の先生方の意見を小学校の先生に伝えたところ、「連携シートにより全体像をつかんでもらっていることがわかった」「学習の到達状況は教科ごとに別途まとめている」「新しいシートの作成では負担が増えるが、現在あるものを添付することにより、子どもの姿をつかんでもらえることには賛成」という意見から、学習面については補助シートとして『学習の到達状況』を添付することとしました。

中学校の先生方が求めている情報を伝えることができるように、記入をする際の視点を以下にまとめました。

##### < 『学習の到達状況』記入の視点 >

その教科で、どこまで習得できているかを記入する

例) 算数：小3の分数まで

履修していない教科、単元を記入する

例) 理科：小6の の実験はしていない

できたときの状況を詳しく記入する

例) 横に支援員がいて細かな指示があった

一斉授業でできた、少人数のグループでできた

共同授業者や支援員がどのようにかかわっていたのかを記入する

例) 一人だけについていた

他の子どもも見ながら、困っているときのみ支援した

なお、このシートは各学校に同様の形式のものがある場合は、それを利用するとよいと思います。また、診断名や検査結果などの個人情報に記載することになりますので、シート作成後は保護者に内容を確認してもらい中学校に渡してください。

\*1 「小1プロブレム」は「小1ギャップ」、\*2 「中1ギャップ」は「中1プロブレム」と、よばれることもある

【 連携シート記入例 】

児 童 の 様 子 (秘)

				作成日	平成20年1月25日	
				作成担当者	大分 花子	
ふりがな 氏名	ぶんご 豊後	いちろう 一郎	性別	(男) 女	生年月日	平成7年10月15日 生
在籍校	市立 第三小学校		保護者名	豊後 太郎		
障がいの 状 況	医師の診断	(有) 無 )				
	医療機関名	( 豊の国 病院 小児精神科 )				
	診断名	( ADHD ) 診断日 ( 平成18年8月 )				
	服薬の有無	( 有 (無) ) 薬の種類 ( )				
諸検査の 結 果	検査名	WISC - 知能検査				
	実施日	平成18年7月25日 ( 検査時の年齢 : 11歳9月 )				
	検査の結果	全検査IQ(FIQ):93 言語性IQ(VIQ):86 動作性IQ(PIQ):101				
	検査名					
	実施日	平成 年 月 日 ( 検査時の年齢 : 歳 月 )				
相談機関 等での相 談歴	相談機関名	県立 養護学校 相談日 ( 平成17年9月から計3回 )				
	相談者	豊国 健一 (平成17年9月)、大分 花子 (平成18年11月、平成19年5月)				
	相談の内容	衝動的な行動、対人関係の築きにくさの原因とその対応、学習の習得について				
	相談機関名	療育支援センター 相談日 ( 平成19年6月 )				
	相談者	本人、母、担任 (大分 花子)				
手帳所持	種別と判定	名称 ( )				
		判定 ( ) 判定日 ( 平成 年 月 )				
進学にあ たり要望 すること	本人・保護 者から	・学習にがんばりたい <本人>				
		・部活動にがんばりたい (卓球部への入部を希望している) <本人>				
		・自転車通学になり、通学距離が長くなるが、毎日がんばりたい <本人>				
		・言い訳をせず、自分の過ちを素直に認めるようになってほしい <保護者>				
		・自分で持ち物を管理をして、忘れ物をしないようになってほしい <保護者>				
	担任・学校 から	・友だちと仲よくしてほしい <保護者>				
		・自分に自信をもち、得意なことを伸ばし、苦手なことは自分なりに少しずつ努力 するようになってほしい				
		・友だちの気持ちを考え、自己中心的にならず、望ましい人間関係を築いてほしい				
		・礼儀正しい挨拶ができ、「ありがとう」「ごめんなさい」を素直に言えるようにな ってほしい				
		・授業中、学習内容とは関係のない事柄を話したくなることを我慢してほしい				
・カッとなると、近くにある物や周囲の人に八つ当たりすることがあるので、自分 で気持ちを落ち着かせる方法を身につけてほしい						

児童の全体的な姿	
得意なこと や興味があること	・ 絵画が得意。創造力があり、独創的な絵を描く。 ・ 自動車やオートバイに興味をもっている。 ・ 手先が器用で、自転車を一人で改造することもある。工作、料理、裁縫も得意としている。
身体状況	・ 健康。左眼の視力がやや低い。(家庭では、長時間ゲームをすることが多い)
生活習慣	・ 身の周りの物の整理が苦手で、持ち物をしまった場所をよく忘れる。忘れ物も多い。
学習面	・ 「読む」「話す」「聞く」「書く」がやや苦手で、話し合い活動では消極的な態度が多い。 ・ 算数が苦手で、小学校5年生の学習内容の理解があいまいなため、個別指導を行っている。
運動面	・ 運動能力が高く、走るのが速い。チーム対抗のゲームを行う際は、ルールを守ることが苦手で、勝手な行動をとってチームワークを乱すこともある。
対人関係	・ 相手の気持ちを考えない発言が多い。自分の意見が容認されないと腹を立てる。

困難な状態に対する支援			
場面	課題	支援	現在の様子
生活面	学級の係仕事、校内の委員会の仕事を最後までやりとおす	仕事の内容、順序、範囲や終了時刻を丁寧に伝えて理解させ、めあてをもたせる。 めあてを達成できたらほめる。	内容や順序、めあてが理解できれば責任をもって取り組める。 することが具体的に理解できないと、取り組みを嫌がるのがまだある。
	学習に必要な道具を忘れずに持ってくる (家庭での準備)	帰りの会で、翌日の持ち物をメモ書きさせた。帰宅後必ずメモを見るように声をかけるとともに、本人の様子を見るように保護者に依頼をした。	家庭の協力を得てメモを見て確認するようになり、忘れ物は減少中。 メモを取ることで、メモで確認するようになり声かけをすることが必要。
	何をやる時間を考えて行動する	活動が一区切りついで次にすることの指示を待つときに、「おしゃべりをしない」と注意するのではなく、「読書をする」「道具を片付ける」など、適切な待ち方を伝えた。	無意識のうちに近くにいる友だちに話しかけることが現在もある。「静かに」という注意ではなく、「～をして待とう」と声をかけると、気を付けるようになってきた。
学習面	意見(質問)を言うときは挙手をし、指名を受けてから話す	教師の説明や他児の発表の途中で話し始めた場合などで、「話が終わった後で聞くよ」「今は我慢。後でね」と声かけをしたり、「発表するときは手を挙げて」と記したカードを指さして、きまりを意識させたりした。	集中できる課題に取り組む際は、それが済むまで黙々と取り組む。また、声かけて話を止める姿も増えてきた。 不意に発言をして教師や他児の話を遮ることがまだ見られるので、声かけ等での意識付けが必要である。
	苦手な課題に対して、すぐに投げ出さずに取り組む	教師がすすめ方を見せて取り組み方を理解させる、解決のヒントを適度に示すなどの工夫をして、意欲をそがないように配慮する。 課題量を調節するとともに、途中で励ましの声かけをする。	取り組みを頑なに拒む場合は、無理強いをしない方がいい。 本児の気持ちをくみ取りながら、どれだけの課題量であれば最後までできそうかを自分で決めさせることが効果的などときもあった。
対人関係	気持ちのよいことばづかいで話し、相手を傷つけることを言わない	教師がモデルを示すとともに、本人及び他児が望ましい発言をした場合	言語量が増え、自分の気持ちを適切なことばで伝えられるようになってきた。 また、相手の気持ちを考えたことばが増えつつある。 スキルトレーニングは継続している。
	カッとなった場合は、別室で落ち着くか、担任へ気持ちを話す	教師と一緒に別室へ行き、クールダウンをする。 本児の気持ちを受容する姿勢で気持ちを聞き取るようにする。	カッしゃくを起こし、物や人に八つ当たりすることは減りつつあるが、感情の高ぶりが、表情や投げやりなことばに現れることもある。 本児が落ち着いたときに受容の姿勢で話を聞くと、素直に反省することができ始めている。叱責は逆効果。

各教科の詳しい様子は、別紙『学習の到達状況』に記入します。

【 連携シート記入例 】

学習の到達状況

氏 名 ( )

教科	学 習 の 到 達 状 況 ( 具体的に )
国 語	小学校4年生までの漢字を読むことができる。 小学校2年生までの漢字を書くことができる。
社 会	3年生の内容は履修した。 4年以降は生活単元学習で扱い、社会科としては履修していない。 6年の下の内容「生活と政治」は扱った。
算 数	小3の分数は理解している。 小3のグラフの理解が難しい。
理 科	教科書にある実験のみを特別支援学級で教師と一緒にいった。他の内容については履修していない。(理科としての履修ではなく、生活単元学習で扱った)
音 楽	一斉授業で行った。リコーダー等の楽器の演奏は支援員が横にいて個別に指導を行った。
図画 工作	<p style="text-align: center;">《 記入のポイント 》</p> <p>その教科で、どこまで習得できているかを記入する 履修していない教科、単元を記入する できたときの状況を詳しく記入する 例) 横に支援員がいて細かな指示があった 一斉授業でできた、少人数のグループでできた 共同授業者や支援員がどのようにかかわっていたのか を記入する</p>
体 育	
家 庭	
外国語 活動	



## 校区内の小学校と連携した教育活動の工夫

### 1. 連携の内容と方法

小・中学校連絡会や互いの学校の授業参観などを行い、卒業（入学）する子どもの様子を事前に理解する取組が県内の各地域で行われています。

ある地域の実践を紹介します。（幼・小・中学校職員研修）

- (1) 幼・小・中学校合同の職員研修
- (2) 情報交換会

#### (1) 幼・小・中学校合同の職員研修

各学校の授業を三校種の職員で参観し、事後研究会を持つことでそれぞれの教育課程や子どもたちの実態を理解し、指導に生かすことができました。中学校の授業研究会では、「生徒



【中学校の授業を参観する小学校の先生方】

が生き生きして授業に取り組んでいた」「生徒が落ち着いている」「楽しい授業で、自分も受けたいと思った」「小学校の外国語活動の時間に出張授業をしてほしい」「生徒同士の認め合いや、細かい箇所での先生からの賞賛が生徒の意欲につながっている」「わからないところを自分から聞くことができる生徒の姿に、成長を感じる」などの感想が小学校の先生方からあげられました。中学校の先生方にとっては、小学校から引き継いだ情報を基に受け入れ体制を整え、一人一人の状況に応じきめ細かく対応してきた支援の成果を提示し、意見交換をするよい機会でした。

小学校の授業研究会では「子どもが、生き生きとしていた」「場の設定・教具の工夫がよかった」「子どもたちの認め合い・支え合いの場が保障されていた」など中学校の先生方から意見が出されました。小学校の授業では「話し合い活動」や「教え合い活動」に重点を置いていることを踏まえ、中学校でも「学び合い」の場面を多く設定し、子どもたちの「学び」が継続し



【小学校の授業を参観する中学校の先生方】

やすい支援の工夫を参観することができました。お互いの学校の研修内容を理解し、授業参観をとおして、小学校での授業方法を基本に、中学校での授業を組み立て、発展させていくことの共通理解をしました。

## (2) 情報交換会

提案授業・研究協議後に幼・小・中学校の情報交換会を実施しました。「幼稚園には、視覚情報を活用した支援が必要な子どもがいる」「小学校には、困難な状態を示す子どもがいる」など、お互いの学校・園の理解はもちろんのこと地域の子どもたちの様子を知ることにより、早い段階から対応について検討することができました。

また、各学校・園が連携している関係機関の情報交換をすることにより、専門的な支援の継続にもつながるものでした。

子どもを知ることにより、お互いの教職員が「幼稚園」「小学校」「中学校」というスパンで子どもたちを育て支援を連携していくことから、「10年間、地域で子どもを育てる」という支援の連続へと意識が変わってきたといえます。

会の中では、「小学生の中学校体験入学」「中学校の体育祭に小学生が参加できる種目の設定」「中学校の文化祭に小学生が参加しやすい雰囲気作り」「小・中連絡会の回数を増やす」など様々なアイデアが出されました。

## 2. 今後に向けて

今回の事例は、幼稚園、小学校、中学校の三校種の先生方が研究会をもつことにより、10年間という長いスパンで子どもの成長を支えていこうという取組でした。また、書面を中心にした連絡会ではなく、実際に日頃の子どもたちの様子を参観してからの情報交換であったため、よりよい支援につながる協議がなされました。

現在よく行われているものに保育所と幼稚園、幼稚園（保育所）と小学校及び小学校と中学校の連携として、「就学前の情報交換会」や「小・中連絡会」があります。いずれの会も年度末に行われています。就学前の情報交換会には、卒園幼児の担任と小学校の1年生の担任が出席します。子どもの年齢が近いため、情報の伝達がスムーズに行われています。しかし、その子どもが入学したときは別の先生が担任することが多いので、新年度になって、学校内での教師間の連携が大切になってきます。一方、小・中連絡会には、6年生の担任と中3を卒業させた後の3年生の担任が出席することが多いです。中学校の卒業生担任は次の年には1年生を担当することが多いので、情報を受け取った本人が担任できるというよさがあります。しかし、小6と中3では接する子どもに3年間の開きがあるため、実態をとらえる意識の面で情報伝達がスムーズにいかないこともあるようです。どちらの場合にも、会に出席した先生から全職員に情報提供がなされているようです。この連携をスムーズにするために連携シートを提案していますが、書面での情報を支援に活かすためには、互いの授業参観は有効であると考えられます。

また、小・中一貫校で行われている「小学校5・6年生の教科担任制」では、中学校の先生による専門的な授業も有効であると考えられています。小学校の児童にとっては、専門的な立場からの教科の指導を受けることができるという利点があります。中学校の先生方にとっては児童の実態把握ができ、中学校での指導の際の配慮点について事前に準備することができるという利点があります。県内の隣接している小・中学校において、お互いの学校の児童生徒理解のため授業交換を行っている実践も報告されています。

今後、各地での幼（保）・小・中学校の連携の工夫が期待されるところです。

## 保護者との連携に向けての支援 - 連絡帳の活用をとおして -

### 1. 生徒の実態把握

#### (1) 学習面や生活場面での様子

生活記録は毎日記入するが、学習用具の忘れ物が多い。

誤字・脱字が多い。

プリント類・机の中の整理整頓に困難を示す。

#### (2) 実態の解釈

生活記録ノートに書き写す際時間がかかるため、必要な内容を書かずに簡略化してしまう。そのため何を持ってくるのかがわからなくなり忘れ物が多い。生活記録の記載や学習道具の準備等については、保護者、教師とも本人の自主性に任せることが多い。画数の多い文字はノートに書き写す段階で正確に書いていないことがあり、誤学習になっていることがある。

忘れ物があるため各教科のノートに記録できず別の用紙に書くことが多い。ノートの代わりに使った用紙の整理が難しいため、学習の積み重ねを確認することができにくい。

### 2. 支援の方向

生徒に負担がかからない生活記録の工夫

### 3. 支援の実際

#### (1) 主体性に任せていた連絡帳

小学校の連絡帳では、保護者と教師それぞれがコメントを書き、情報交換することが多いようです。持ち物の準備に当たっては、持ってくるものの確認ができるよう「月曜セット」などの名称で印象づけ、「月曜日には体操着・タオル・上靴を持ってくるよ」という細かい指導がなされています。

中学生になると、連絡黒板の記載は生徒の係活動の一つとなります。係の生徒は教師から聞き取ったものを書いていきます。連絡黒板に記入する際、全ての準備物を書いていたのでは時間がかかります。ある中学校では、中学校生活に慣れてきたり、先輩の様子を見たりすることにより「いつもの」とだけ書かれるようになりました。連絡黒板を見た生徒も同様に生活記録（連絡帳）の内容・持ち物の欄に、「いつもの」と書きます。書く時には短時間で負担も少ないのですが、実際に準備をするときに何を揃えてよいのかが分かりません。そのため忘れ物が多くなってしまいます。また、保護者も教師も本人の自主性を重ん

月	日	教科	内容
	1		いつもの
	2		いつもの
	3		いつもの
	4		いつもの
	5		いつもの
	6		いつもの

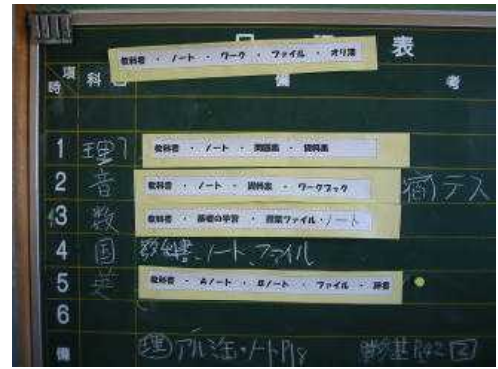
【生徒が簡略化して書いた生活ノート】



じるといふ姿勢から細かく連絡帳を見ることが減り、情報交換も少なくなりがちです。

### (2) 連絡黒板の工夫

連絡黒板を見ることで各教科毎に必要なものが分かるようにするためにカードを作成しました。「いつもの」と書かれていた連絡黒板は右図のように変わりました。翌日の日課に応じて必要なカードを貼ります。カードに記されていないものについてのみ書き添えることにしました。

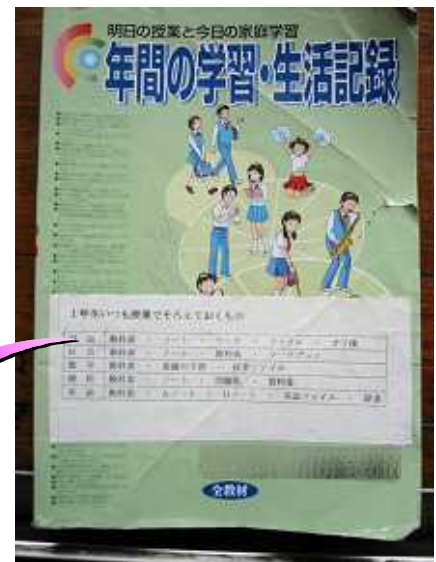


【連絡黒板の工夫】

このようにすることで、帰りの学活の時間に明日の準備物が短時間で確認できるようになりました。

### (3) 生活記録(連絡帳)の表紙に一工夫

連絡黒板が工夫されたことにより、学活の時間に明日の準備物は確認できるのですが、生活記録に書く時に時間がかかるという生徒の実態は、変わっていません。そこで、本人が書く内容については増やさずに、連絡帳の表紙に「1年生いつも授業でそろえておくもの」一覧を貼り付けて、それを見れば準備ができるようにしました。また、ケースを用意してそれに全てを入れながら確認するという取組につなげました。



【表紙に各教科の持ち物を貼った生活ノート】

1年生いつも授業でそろえておくもの

国語	教科書・ノート・ワーク・ファイル・オリ漢
社会	教科書・ノート・資料集・ワークブック
数学	教科書・基礎の学習・授業ファイル
理科	教科書・ノート・問題集・資料集
英語	教科書・Aノート・Bノート・英語ファイル・辞書

### (4) 保護者と教師がコメントを入れるようになった連絡帳

連絡黒板や生活記録(連絡帳)の工夫により、生徒の意識も少しずつ変容してきましたが、忘れ物をすることもありました。

そこで、本人の自主性に任せているばかりではなく保護者の協力により、生活記録に保護者と担任がコメントを入れるようにしました。

教師からのコメントで、保護者は適切に本人を認めることができます。準備物等で必要なことばかけをすることもできます。また保護者からのコメントで、教師は家庭での様子を知ることができ、生徒指導や教科指導に生かすことも可能になってきました。保護者、教師からともに認められることが生徒の自信にもつながりました。



【コメントの入った生活ノート】

#### 4. 今後に向けて

今回の取組は、生徒本人に負担をかけずに環境を整えることと、保護者と教師の連携が有効であったといえます。しかし、学級の生徒数が多い場合、全ての生徒にこのような支援ができるというわけではありません。

小学校の時には、「読み聞かせの時間」や「集会活動」などに保護者が来校することもあり、学校で過ごす子どもの様子を見る機会が多いといえます。しかし、中学校になると保護者が学校に行くのはPTAの時や面談が主で、学校で過ごす生徒の様子を直接観る機会も減ってきます。

そこで、学級通信を活用して情報交換をすることにより学校と家庭が連携し、保護者の協力を得ているという事例を紹介します。

通信の左端に斜めに点線を入れ、保護者からのコメントのスペースを設けています。コメントを書いた保護者は、一辺だけをカットし生徒に持たせるという手軽さから、意見を寄せてくれました。その意見を通信で取り上げることで、学級全員の保護者と意見を共有することができます。このサイクルはすぐに定着し、多くのコメントが寄せられるようになりました。

また、生徒のコメントや感想文などもそのまま

【保護者の意見を載せた通信】



【学級通信の返信欄（拡大）】



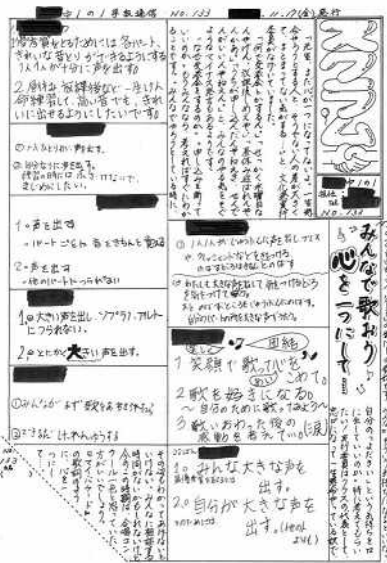
通信に掲載します。自分の子どもの考えを知ることによって家庭での会話の糸口になります。学級全体の生徒の雰囲気も知ることができ、学校への関心も高まります。

【保護者からの返信を貼ったノート】



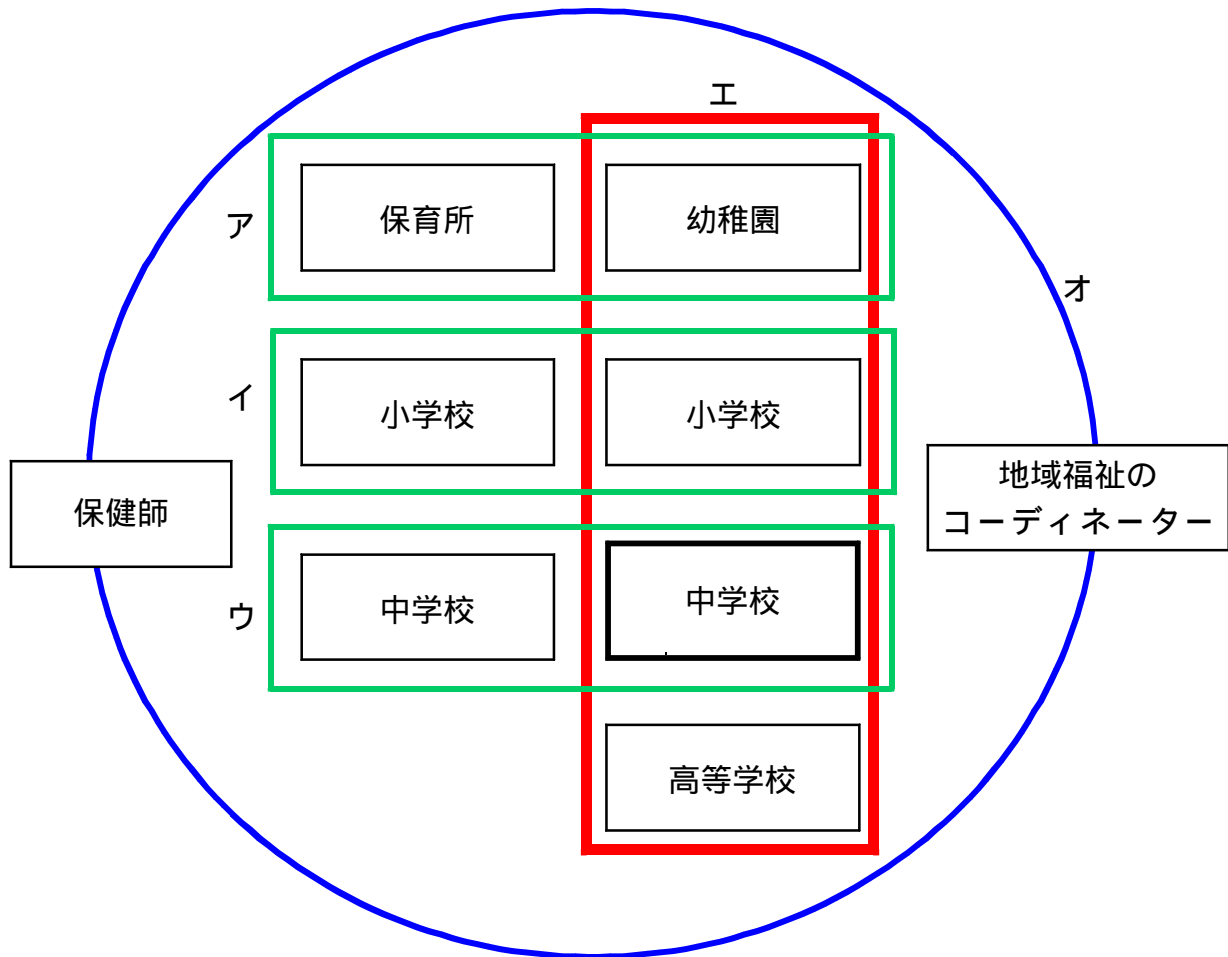
中学校では学年通信を出している学校が多いようです。半分は学年通信・半分は学級オリジナルのものという構成で、学級の様子を保護者に伝えていくという方法もあるでしょう。

【生徒のコメントを載せた学級通信】





A 中学校を中心にした『たての連携』・『よこの連携』

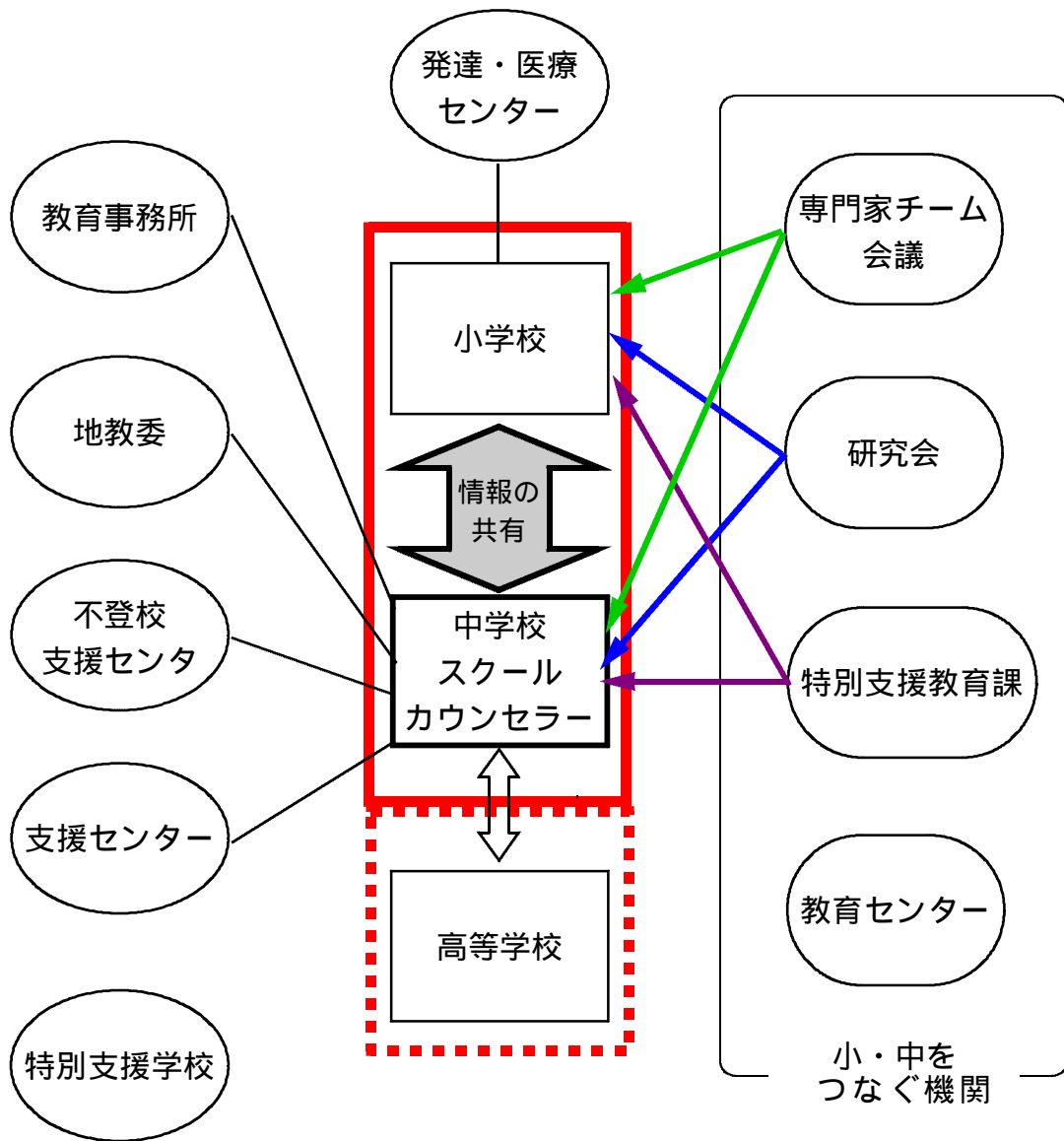


支援を必要としている子どもや家族にとって、地域の中で豊かに生きていくためには安心して過ごすことのできる「居場所」が必要です。保育所、幼稚園、小・中・高等学校はその大切な居場所です。それぞれの居場所がうまく連携をとり、「信頼感のあるつながり」が増えることが、子どもや家族を支援することになります。

よこの連携としては、同年代の子どもを担当している先生方の情報交換。(図中アイウ)  
たての連携としては、なめらかに次の学校につなげるための幼稚園(保育所)、小学校、中学校、高等学校の情報交換が重要になってきます。(図中エ)

支援を必要としている子どもが教育を受けいている間は、その学校をとおして他の関係機関や社会との接点があるのですが、卒業すると支援がとぎれてしまうケースもあります。社会へつなげるには、保健師、地域福祉のコーディネーターの力を借りることも一つの方法です。(図中オ)

A 中学校を中心にした関係機関との連携



関係機関との連携についての詳細は、次ページ「中学校を中心にした関係機関との連携」を参照ください

中学校を中心にした関係機関との連携一覧

	実施機関等	担当者等の名称	連携、業務の概要
教 育	小・中学校、高等学校	・特別支援教育 コーディネーター	学校内または福祉、医療等の関係機関の連絡調整や保護者に対する学校の窓口
	中学校等	・スクール カウンセラー	生徒の心のサポート、校内委員会への情報提供
	不登校支援センター (市町村教育委員会設置)	・相談員 ・指導員	不登校の状態にある生徒に対し、カウンセリングによる心の安定を図る
	教育事務所	・指導主事	地教委や各学校の情報収集 学校視察
	市町村教育委員会	・指導主事	就学指導 市町村特別支援連携協議会での情報収集
	県立特別支援学校	・特別支援教育 コーディネーター ・巡回相談員	巡回教育相談による支援方法や内容の検討や個別の指導計画の作成や教育支援計画の策定についての助言（県内15校）
	専門家チーム相談会	・医師 ・大学教授 ・臨床心理士等	医師や大学教授等からの専門的な助言 (県内7ヶ所の県立特別支援学校に事務局設置)
	研究会 (地域の教職員研究会)	・管理職 ・教諭	教科研究 卒業後の追跡調査
	特別支援教教育課	・指導主事	就学指導 大分県特別支援連携協議会での情報収集
	大分県教育センター (特別支援教育部)	・指導主事	特別支援教育相談、教育相談
福 祉	発達障がい者 支援センター 「イコール」	・相談員等	発達障がい者を有する障がい児者及びその家族に対し、相談支援、発達支援、就労支援、普及啓発及び研修の実施
	地域療育等支援事業所	・相談支援専門員 (地域福祉の コーディネーター)	発達や成長に関する悩みについての相談県内10箇所に設置されている。 (平成20年度障がい者福祉のしおり大分県 参照)

おわりに

中学校の新しい学習指導要領には、「関係機関と連携した計画（個別の教育支援計画）」の策定に努める旨があらたに付記されました。これは、学校、福祉、医療、地域の企業等が連携し多くの人の顔が見える支援が大切なこと、そのこと通して本人や保護者が安心して暮らせる地域づくりへの願いがこめられているメッセージであると思います。

診断等の有無にかかわらず、どの生徒も学習面でのつまずきや行動のコントロールの難しさ、対人関係づくりの難しさなどの側面を多少なりとも持っています。発達障がいのある生徒を理解し実態に応じた支援を行うことは、全ての生徒の教科指導や円滑な人間関係作り、部活動の充実など学校全体にプラスの効果が期待できます。また、本手引き書に示しているような「板書時のきまり」等は、教科指導上の一般的な工夫ですが、結果的には、障がいのある生徒への支援にもなります。

是非とも、全ての先生方がこのような意識をもって特別支援教育を実践されますことを期待します。

なお、既にインターネット上に公開しています「支援の手引き～幼稚園版～」、「支援の手引き～小学校版～」には、行動面や対人関係面についての支援の事例や基本的な支援方法等も掲載しており併せて活用していただければ幸いです。

大分県教育センター 特別支援教育部

福地広之 梶原直樹 石井知由美 大本良子 木村睦男



## 【参考文献】

- ( 1 ) 月森久江 編集 「教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編」  
図書文化社 2006
- ( 2 ) 佐々木正美監修「アスペルガー症候群のすべてがわかる本」 講談社 2007
- ( 3 ) 榊原洋一 著 「AD/HDのすべてがわかる本」 小学館 2007
- ( 4 ) 「特別支援学校学習指導要領」 文部科学省
- ( 5 ) 柘植 雅義 秋田 喜代美 納富 恵子 佐藤 紘昭 編著  
「LD・ADHD・高機能自閉症等の指導  
自立をめざす生徒の学習・メンタル・進路指導」 東洋館出版社 2007
- ( 6 ) 上野一彦 篁倫子 海津亜希子 著 日本文化科学社 2006  
「LDI ～LD判断のための調査票～」
- ( 7 ) 上野一彦 篁倫子 海津亜希子 著 日本文化科学社 2008  
「LDI-R ～LD判断のための調査票～」
- ( 8 ) 奈良地域生活支援ネットワーク 編 「子育て応援ブック」 ファコ企画
- ( 9 ) 遠藤 友麗 編著 「中学校学習指導要領の展開」 明治図書 2000
- ( 10 ) アトリエ・ワン 編 「デッサンを楽しむ」 大月書店 1995
- ( 11 ) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 著 ジアース教育新社 2008  
「肢体不自由のある子どもの教科指導Q&A～「見えにくさ・とらえにくさ」をふ  
まえた確かな実践～」
- 資料(パワーポイント) -
- ( 12 ) LD (学習障害)のすべてがわかる本 上野一彦 監修 講談社
- ( 13 ) 学習障害(LD)及びその周辺の子どもたち - 特性に対する対応を考える - 同成社
- ( 14 ) 小中学校における軽度発達障がい児の支援体制の整備 Vol.2 大分県教育委員会CD
- ( 15 ) 中学・高校におけるLD・ADHD・高機能自閉症等の指導  
自立をめざす生徒の学習・メンタル・進路指導 東洋館出版社
- ( 16 ) 特別支援教育研究 (日本文化科学社)(2007 No.603 )(2008 No.614 )
- ( 17 ) 特別支援教育コーディネーター研修 講義資料より 国特研 渥美美賢